

鳴門秘帖

木曾の巻

吉川英治

青空文庫

送り狼

未明のうちに、本郷森川宿（しゆく）を出たお綱と万吉とが、中仙道をはかどつて、もうそろそろ碓氷峠（うすいとうげ）の姿や、浅間の噴煙（けむり）を仰いでいようと思われる頃、——三日おくれて、同じ中仙道の宿駅に、三人づれの浪人を見ることができると。

それが、例の、お十夜と、一角と周馬であつた。

こん度の旅は、無論、お綱と万吉のあとを追つて、そのうえに、法月弦之丞（のりづきげんのじよう）を刺止（しと）めるまでの目的だろうに、わらじ、野袴（のばかま）、編笠（あみがさ）という、本格の支度をしているのは天堂一角だけで、周馬は笠なし、お十夜は、笠もわらじも嫌いだといつて、素（す）のまま着流しに草履（ふうてい）ばきという風態。

まだ軽井沢ぐらいはいいが、それから先の和田峠、猪（い）の字ヶ原（じ）の高原、木曾の※所（せつしよ）などへかかったら、どうする気だろうと思われるが、小手調べの碓氷峠でも、さして難儀な顔もみせないところは、お十夜も周馬も、旅にはひとかどの見識をもつものとみえる。

「はてな？ ……まさか、おれたちの行く道が見当違いをしているのじゃあるまいな」

上田の城下へ入る前に、追^{おい}分^{わけ}の辻から佐久^{さく}街道へ折れて、青々とした麦畑や、菜^なの花^{はな}に染め分けられた耕地や森や、千曲^{ちくま}の清^{せい}冽^{れつ}などを見渡しながら、フイに、お十夜がこう言いだした。

「なぜ？」

と、ふりかえったのは天堂一角。

根岸の闇で、法月弦之丞にやられた太刀傷^{たちきず}が致命にいたらなかったまでも、かなり深傷^{ふかで}であつたとみえて、いまだに左手を首に吊っているのが、いかにも暴勇な剣客らしく目立つて、往來の者が必ず、ふりかえつてゆく。

「冗談じゃアねえ」

と、お十夜はふところ手で、

「もう江戸から四十里余り、三晩も泊りを重ねているのに、行っても行っても、万吉とお綱の姿が先に見当らねえじゃアねえか」

「そのことなら心配は無用だ。まさかに使屋の半次が、口から出放題なことを言いはい」

「それなら、もうたいがいに追いついている筈だが」

「イヤ大丈夫。実は小諸こもろの立場たてばで念入りに聞いておいたことがある。ちようど、きのうの朝立ちで、それらしい二人づれが、間違いなくこの街道へ折れたという問屋場といやばの話であつた」

「ふうむ……そうか。すると今のところで、日数にしてたつた一日、道のりにして小十里しか離れていない勘定になる。それじゃ、もう一息で追いつけるだろう」

と、お十夜の語気は、景趣の変化につれて旅らしい軽快をもつてきたが、周馬は、いっこう面白くない顔で、どこかで折つた桑の枝を、杖とも鞭むちともつかずに持つて、一番あとからおくれがちに歩いてくる。で、一角が、

「一服やろうではないか」

千曲ちくまの板橋を渡るとすぐに、日当りのいい河原蓬かわらよもぎへ腰をおろすと、

「よかろう——少し時間は惜しいが」

とお十夜も煙草入れを出して、きれいな玉石を床しょうぎ凡にとつた。

「まだまだ先は永いから、そうあせるには及ぶまい。おい、旅川氏たびかわうじ」

「なんだ」

「少し休息してまいろう」

「さようか」

「貴公、あまり旅を好まぬとみえる」

「旅は好きだが、どうも、こんどの旅ははなはだ面白くない。人間の感情は正直だ、アテのない道かと思うと一日に十里の旅は楽でない」

「これは頼もしくない言葉。なぜ、今度の旅にアテがないと申されるか」

「孫兵衛や貴殿はいい。しかし、この周馬にとってみれば、こうまでしても、万吉や弦之丞を殺さねばならぬという必要がない」

「ばかなことを。墨屋敷すみやしきを焼いたのはお綱の為業しわざでござるぞ。また、お千絵をあゝして奪ったのは万吉でござるぞ、よいか！　そしてそれを傀儡かいらいしたやつは法月弦之丞ではないか。それでも貴公は、きやつらに何の怨みもないか！　いやさ、吾々と力を協あわせて、その怨みうらみを思い知らせてやるという気が起こらぬのか」

「どうも大して起こらぬなあ」

「ちイッ。ぶ、武士らしくもないッ」

「お千絵といい、墨屋敷の財宝も、今ではみんな幻滅となってしまうた。その揚句あげくに命がけで、万吉や弦之丞を狙ったところで、何の埋うめ合せあわにもなりはしない。拙者はもうここ

でお別れいたすよ。江戸へ帰って寝ていた方がはるかましだ」

「その無念を晴らすがいいではないか。その怨みを！」

「でも——親の仇ではないからなあ」

周馬が歪ゆがんだもの言いぶりに、一角はムツとなつて、

「だれが親の仇だといった？」

煙管きせるを片手にもつて立ち上がった。

相手が、胸板へ迫つてきた血相に、周馬は少し言いすぎたことを後悔したが、行きがかりとなつた唇は心と反対に動いて、

「うわツ面つらなあげ足をとるな！ それまで深い遺恨いこんはもてぬといったまでの分ぶんではないか」

「ばかなツ」と、一角はそれを睨み返した。

「では、なぜ、江戸を立つ前にそういうわぬか。ここまで来た旅先で、面白くもないケチをつける奴だ」

「ケチはつけんよ、ただ旅川周馬一個人の立場について言明しているのだ」

「臆病風おくびようかぜにさそわれてきたのだろう。江戸表にいるうちは、貴様も吾々と合が体たいして、

どこまでも、法月弦之丞を討つと誓い、また、万吉も生かしてはおけぬと罵つていたではないか」

「それは、そう思ったこともある。しかし、遺恨の怨みというやつは、カッとなったときこそ真剣にもなれるが、明けても暮れても、いつまで火の玉みたいになつてはおられない。ことにサ、旅になんぞ出てみると、よけいに冷静になるからなア」

「じゃアどうでも、吾々と目的を一ツにして行く気はないというのだな」

「オイ天堂氏。よく貴公は目的目的というけれど、これからお綱や万吉に追いついて、なお、弦之丞を討つたにしても、いったいその暁に、この周馬は何をつかむ勘定になるんだな？　それが拙者には茫漠なのだ」

「勘定？　……フーム、すると貴様はなんだな、すべて最初から、打算一方でかかつているのか。武士の意気地もなく、また、復讐の念慮もなく」

「だれが意気地ばかりで命がけになれるものか。早い話がお手前にしろ、お十夜にしろ、みな胸に一物ある仕事ではないか。——周馬にはその報酬がない」

「呆れてものがいえぬわい。まるで腐った町人根性、もうそんな似而非侍とつきあう要はない、いやならここから帰れ帰れ！」

「なんだ、帰れとは！」

周馬も少し目柱めばしらを立てた。

いくら武士の意地立てを輕蔑けいべつしている周馬でも、ここまで罵倒ばとうされれば存分だ。そして思わず左の手が鯉口へ行つてしまったので、いやでも右の肩が挑戰的に一角の胸に寄りつく。

カチカチと、河原の石で煙管きせるの首をはたきながら、お十夜孫兵衛、こいつアおもしろい、周馬と一角でぶつかり合つて、どんな仲間割れを演じるか、やるまでやらしておいてみよう——という態度で、止めともせず、また葉煙草を悠々とつめている。

「なんだ、帰れとは！」旅川周馬、重ねて癪かんにふるえながら、

「万吉やお綱はとにかく、弦之丞を討つには、お十夜の腕でもまだ心細いから、ぜひ助太刀を頼むと、いんぎんに、汝なんじが両手について頼んだからこそ同道してやったのだ。それを、帰れとはなんだ！ 帰れとはッ」

「やかましいわッ。貴様も多少は頼み甲斐になる奴かと見そこなつて、蜂須賀家の御事情まで洩らしたが、その性根しょうねを聞いていやになった。もう頼まん！ 身どもと孫兵衛とできつと弦之丞を討つてみせる」

「才、そんなことは勝手にせい」

「いらざることを！ トットと江戸表へ引つ返せ」

「誰が！」と周馬は、パツと袴はかまをはたいて、

「ウム、ここで別れてくれる」と、青筋を立てて歩きかけると、天堂一角、業腹ごうはらでたまらないように、つかんでいた銀延ぎんのべの煙管を、周馬の横顔に叩きつけて、

「ふた股また武士めツ」とのしつた。

その煙管が運わるく、小柄こつかのように、コツンと周馬のこめかみを打ったので、さすがのかれも、そのまま後ろをみせて立ち去ることもならず、

「ウヌ！」

と腰の一刀を抜き払って、天堂一角の真眉間まみけんへ跳びかかった。

抜くまでの意気地はあるまいと、周馬の足元を、あまり見くびりすぎていたのと、左手の利きかないために、一角は不意をくらって、あッ——とうしろへ飛びかわしたが、大きな玉石につまずいて、よろりと腰を砕いたので、仆れながら片手払いにパチンと抜きあわせた。

お十夜はニヤニヤ笑って眺めていた、吸いつけた煙管を口にくわえたままで。

この勝負をほうっしておいたらどうなるだろう？

天堂一角にして左手の自由がきけば、もちろん、勝目は問うところではないが、まだ繃^ほ帯^{うたい}のとれぬ片腕が、よほど体のかけ引きを妨^{さまた}げるから、そこに、かなりの力量を減退^{さくたい}されるものとみなければならぬ。

一方の周馬はといえば、これは、太刀筋において、グツと劣るが、最初から、あらん限りな罵詈^{ばり}を浴びせられた揚句^{あげく}で、無茶にムラツとした途端^きの切ツ尖^{さき}であるから、ふだんの周馬の実質よりも、相当な強みを加えている筈だ。

とすると、この仲間われの斬合いは、まず一角六分、周馬四分の力とみて、いずれは双方斬ツつ斬られつ、相討^{あいうち}に近いケリをつけるのがおちであろう。

鬪^{とうけい}鶏^{けい}のカケ合せでも見るようにお十夜はこう考えて、冷淡に落ちついていたが、まさか、血をみるまでほうっもおおけず、やツと二人をかき分けて、

「どうしたツていうんだ。周馬も一角も」

と、仔細^{しさい}らしく仲裁に入った。

「イヤ、どいてくれ！ お十夜」

こうなると周馬は一そう息巻いて、

「あまりといえ口の過ぎた天堂の言い分、叩ッ斬ってくれねば虫が納まらん」

「片腹痛いことを、なんで貴様のようなへ口へ口武士に」

満顔を朱にして、一角も片手にかぶった大刀を下ろそうとはしない。その太い腕節うでつぶしにはみみずのような血管がふくれている。

「旅先で兄弟喧嘩はよそうじやねえか。え、一角。オイ周馬」

「ム、しかし、周馬を無事に江戸へ帰すと、阿波の内密を吹ふい聴ちやういたさぬ限りもない。

拙者は主君のお家のためにも、この二股武士またを生かしてはおけぬ」

「まさか、いくら周馬でも、そこまで悪気がある訳ではあるまい。まあ、このお十夜に任しておいてくれ、周馬の気持はよく分っている」

考えてみれば一角も、法月弦之丞という強敵をひかえている前に、一人の味方を失うのは得策でない。周馬も、一時、カツとした疳筋かんすじの血が下がってみれば、もとより、好むところの斬合いではないので、不承不承ふしようぶしように、イヤ、むしろホツとした気持で、お十夜の扱いに任せることになった。

で、その晩は、小ちいさがた県しもわだじゆくの下和田宿はたごに着いて、いかがわしい旅籠はたごでいかがわしい女ど

もを揚げ、いかがわしい酒と肴さかなで、昼の仲直りということになり、酔えいがたけなわとなるに

及んでは、周馬がいかがわしい三味線に合せて、怪しげな江戸唄の声自慢までやりだした。

これで、酔すいちゆう中の妥協もついた。だいぶ酔ったらしい天堂一角、振分けを解いて、今

まで二人に示したことの無い、蜂須賀阿波守のお墨すみつき付を出してみせたりした。

そして、天堂一角は、どういう胸算をもっているのか、大望たいもうを遂げて帰国すれば、蜂

須賀家では屈指くっしな格式にとりあげられるのは無論のこと、やがてまた、幕府が仆れ蜂須賀

家が將軍の職をつぐ日には、自分も、十万石や二十万石の大名に成り上がることになる。

つまり、今はその階梯かいいていだと、すばらしい気焰をあげて、周馬やお十夜の欲望のあまりに

小さいことを冷笑した。

その揚句あげくに、いよいよろれつの廻らぬ舌で、

「だ、だから、貴公たちもすこし大きな慾を、か、か、かいたらどんなものでござる。：

女！ あはははは……女なんテ、ウーイ、女なんテ、ありや、男が畢生ひっせいの力をぶち込

むものにはなりませんぞ。うふふふ……ウソとお考えなさるなら、お十夜殿、アイヤ周

馬先生、ど、ど、堂島へ出て、万金を賭して相場をやってごらんさい。お、お綱だッて、

お千絵様のことだッて頭から消えてしまう。イヤ、当然に消えてしまう！」

と、天堂一角、怖ろしく自信をもつて、また珍らしくグデングデンに酔つて、八戒かいのよ
うに寝てしまった。

だが、そんな酔いどれの哲学に頓着なく、お十夜は、座の目ぼしい女をさらつていつの
まにか別間へかくれ、周馬もそれに習つて、お千絵様を夢みながら、お千絵様とは似もつ
かぬ飯盛めしもりと旅のふすまをひつかついだ。

翌朝は、三人とも元氣に肩を並べて、霞かすみの晴れるまに大門峠だいもんを越え、和田村をすぎて、
やがて午少ひるし過ぎには、和田の大峠おおとうげをのぼりつめた。

佐平治茶屋で支度をすまして、やおら、立ち上がつて日ざしをみた。まだ七刻ななつにはかな
り間がある。諏訪泊りには楽な時間。

九輪草りんそうの多い下り道を、少し大股になりかけると、削り落したような絶壁の下から、
うねうねと溪谷けいこくに曲つていく道を、先に、話しながらいく男と女がチラと目に止まった。

やま
山の俊寛しゅんかん

花が散る花が散る。

天女にも五衰すいの相そうの悲しみはあるというが、花の梢こずえは、いくら散つても散つても衰えな
いで、大地に空に、クルクルクルクル白びやっこう光の渦を描いてめぐる。

これがほんとの朧夜おぼろよというのだろう。

微風そよかぜはぬるく耳をなでるが、耳を驚かす音としてはなない。空も森も伽藍がらんも池も山門も、
ありとあらゆる象かたちのものが、シットリとした水気みずけをふくんで、錫すずの細粉さいふんでも舞っている
ように光る、ほのかな春月がどこかしらにある。

その明りもきわめて鈍く、目をみはればみはるほど、白毫びやくこうの光が睫毛まつげをさえぎるの
で、ここはどこかしら？ と思ひ惑つているとかすかに一点の御灯みあかしがみえる。

アア、江戸で有名な、浅草の観音堂だ。

道理で、五重の塔がある、淡島堂あわしまがある。弁天山べんてんの鐘楼しょうろうがある。

オヤ、誰かきたらしい。

小さい娘の跽音あしおとだ。

なんという可愛らしい小娘だろう。一人かと思つたら、また同い年ぐらいな少女が後か
らくる。何しに今ごろ通るのだろう？

道づれなのか？ 別々なのか？ だが、どっちにしても、なんと似ている少女だろう。

オヤ、いけない、二人ともに目がつぶれている、手探りで歩いている——アアあぶない、あんな方へ。

おいおい、そんな方へ向いてゆくとあぶないよ。

池があるよ。橋は向うだよ。

おーい。聞こえないとみえる。おーい。

空の模様が変ってきた。

はなつむじ花旋風にさらわれるなよ、通り魔に肌を切られるなよ。あれッ、盲の小娘はどうした

？ 盲の小娘は？ どこかでヒーツと泣いているようだが……。

しまった。

とうとう池に落ちてしまった。ああ、溺れてゆく、もがいている。

誰か助けてやらないか、かんぜおん観世音はアレを救おうとしないのか、あのめしい盲目の小娘を見殺

しにするのか。

いけないいけない、見るまに深いほうへ入ってゆく、アア悲しそうな顔を向けて——。

や！ しかも、しかも！ あれは他人ではないぞ、わしの娘ではないか、オオわしの娘だ、どっちもわしの娘なのだ。

早く助けてやってくれい。

誰か——誰か。

わしはあすこへ行くことができない。

誰かいないか、人はいないか。

アア 観世音菩薩。
かんぜおんぼさつ

あれは私の娘です。

お千絵です——お綱です。

*

*

*

四国阿波の国第一の峻峰、つるぎ山の頂から一羽の角鷹が、バタバタバタと翼を
あわ しゅんぽう もこ かすみ
鳴らして斜めに飛び、やがて、模糊とした霞の底へ沈んで行つた。

何かの音におどろかされて、甲賀世阿弥は、ふツと、深い夢からさめた。
こうがよあみ

さめて、あたりの現実を見廻してみると、ここは江戸の観音堂でもなく、また花の散る
おほろよ
朧夜でもなかった。

江戸の地から何百里を隔て、本土の国とは鳴門の海を隔てた阿波の国——。それも、海
を抜くこと六千尺にあまるつるぎ山の洞窟である。

チチ、チチ、と山千禽やまちどりのさえずりが聞こえるから、もう夜は明けているのだろうが、世阿弥の側には、魚油ともを点した火皿ひざらの燈心が、今のかれの命のように、心細く燃え残っている。

「ああ……」

と世阿弥は、夢の疲れを太く呻うめいた。

この洞窟の中こそ、つるぎ山の間者牢かんじやろうである。かれが十一年の春秋をくり返した阿波の山牢やまろう。

また今年も、雪が解けて、春がきて、木の芽が吹いた。そして、きょうという日の夜が明けたが、それは、世阿弥にとつて何の希望を意味するものでもなかった。

深い洞窟の中は、三間幅げんばぐらいな板敷となっていて、そこに、藁いごぎや獣皮が敷いてあった。

ぬらぬらと光つて、生きもののような岩の肌からしたたる雪しずくが、冬は氷柱つららとなつて剣つるぎの天井となり、夏はポタポタと乳のごとく清水しみずを降らすので、いつか世阿弥が黒木柱を組んで、その上へ、柏葉樹はくようじゆの葉をたくさんに葺ふいておいたが、それも今では、真ツ黒に朽ち

て、時折、氷より冷やかな白玉を襟すじに落してくる。

「ああ、夢だった……」

やがて世阿弥はこういつて、残り惜しそうな眼をあげた。

夢ほど楽しいものはない。夢はこの山牢を解放して、剣山から江戸までもさまよわせてくれる。今の世阿弥と現実の世の中との交渉は、ただ時折にみる夢だけに繋がれている。

やがて、かれは薄暗い岩窟から外へ這いだした。

そこには、何ものも萌え立たせずにはおかぬ春の太陽が、らんらんと群峰の肩からのぼりかけていた。鶉、樞鳥、駒鳥、岩乙鳥、さまざまな鳥がその恵みを礼讃し、あたりの山草や植物も、かがやかしい芽や花に力をみせて、世阿弥の瞳はクラクラとしてしまった。

「あ……」と、かれは、痛いように、両手を顔に当てながら、洞窟の前からトボトボと低地の水際へ下りて行つた。十一年もの間、岩窟に起き伏していたせいもあるが、その姿は、この世の人とは思われない。陽の前に立つても、かれには影がないようだ。

岩から岩へチロチロ流れてくる雪解の水に、世阿弥は、ガクリと膝をついた。藁でつなねた麻のような髪を濡らして撫であげた。

そして、その清冽せいれつに口をそそぎかけた時、かれは、意外な物を見つけだした。あわてうがいの水を吐いて、向うの草むらへ飛びついた。

そこに四、五本の花梨かりんの木が生えていた。秋から冬にかけて黄色い果実がつく頃には、この樹の実みがもつ特色のある芳香が、世阿弥をひどく慰めてくれるので、友達のような気がする樹である。今みると、その木の根にからむ雑草の中に、一本の、真新しい狩矢かりやが突っ立っている。

抜いてみると、矢羽はぜいたくな鷹たかの石打いしうち、やじりは槓まきの葉形のドキドキするものであった。それに錆さびがみえないところから察するに、つい、昨日かきような流れ矢であろうと思われる。

「ほ、また誰か、徳島城の者が、山へムダ矢を放ちにきているな……」

こんなことをつぶやきながら、世阿弥はそれをつかんで、洞窟の前へ戻ってきた。そして、日光に目を慣らしてから、改めて、その矢骨をズーと眺め廻していると、やじり二寸ほど上がったところに、沈金彫ちんきんぼりで蚤のみのような細字。

竹屋三位有村たけや みありむら。

という切銘きりめいが読まれた。

「ああ竹屋……竹屋三位？……」

かれにも記憶のある名とみえてややしばらく、それをみつめていると、どこかで明らかに人声^{けいのすけ}がきこえた。だした。

「啓之助、啓之助」

「はッ」

「どうした？ 意気地のない奴じや」

「イヤ、意気地のないわけではございませんが、さすがに、俱利伽羅坂^{くりからざか}十八町を、ひと息に上つてまいったので、やや疲労をおぼえました」

「まだ、この上には一ノ森、二ノ森の嶮路^{けんろ}がある。そんなことでは心細いぞ」

「いや、とんでもないことを」

「なにがとんでもないことじや」

「春とは申せ、まだ溪谷^{けいこく}には雪があり、藤の森あたりはすこぶる危険でございます」

「ばかを申せ。きようは是が非でも二ノ森を踏破^{つるぎ}して、お花畑^ての天ツ辺^{ぺん}から三十五社、蟻^{あり}の細道、または人跡未踏という、剣^{つるぎ}の刃渡り、百足虫腹^{むかでばら}までも、越えてみなければ気がすまぬ」

「なんと仰せあらうとも、まだ五月にならぬうちは、これより上のお供はできません」

「ではこのほう一人で登りつめる」

「また有村様の横紙破りな。万一お怪我のある時には、この啓之助の落度として、殿より御叱責をうけねばなりません。どうぞ、今日はこの辺で、ひとつ日置流のお手際を拝見いたしたいもので」

朽葉一枚こぼれても、カラカラとひびく山中の静寂——、それはだいぶ遠いらしいが、世阿弥の耳へは怖ろしく近く聞こえてくる。

空谷の跽音である。

世阿弥は耳をたてて、その人声のする方へ伸びあがった。

たいそう近くに聞こえると思ったが、その実在は遠くであつた。かれのおる山牢は、一面の矮生植物につつまれた、瘤のような地点だが、そこから見下ろすとズツと麓にあたる所に、ポチと、二個の寸影が立っている。

「お、あの人物だな……。だが、山目付でもないらしい？ ……」とつぶやくうちに、世阿弥の姿が、ガサガサと樹木をわけて、その人影の方へ下って行った。

しかし、ある程度まで下りてゆくと、もうその先へは一步も出られぬことになっている。なぜかといえ、つるぎ山のぞ覗き滝の深潭しんたんから穴吹川へ落ちてゆく激流が、とうとう飛沫ひまつを散らしている上に、その岩壁に添って、瘤山こぶやまの瀬をグルリと柵さくでめぐらしてあるからである。

つまりこの瘤山は、ひとつの山の離れ島をなしているわけだ。かれの終身間者ふもと牢は、この自然の地形と、人為の柵内とに局限されている上に、また、ここと麓の間には、三カ所の山関があつて、たえず詰役つめやくの山番がいるから、どうしたつて遁れだすことはできない。そしてその山見廻りは、麻植おえ、板野いたのの里あたりの原土はらしが交代で詰めることになっている。

甲賀世阿弥。

今——このつるぎ山の奥に、めつたにない人語を聞いたので、吾を忘れて、瘤山の柵ぎわまで駆け下りたが、別に、なんぞこれという目的があつたのではない。ただ、その人影へ本能的に引きよせられたまでのこと。

ちようど身の丈たけぐらいな這松はいまつやつつじが、うまく体を蔽おほい隠したので、そのままジツと、柵の外を眺めていると、さつき俱利伽羅坂くりからざかの上にみえた二人が、依然と、はばかりない高声で話しながら、すぐ流れの向うへまできて、姐板岩まないたいわの端へ腰を下ろした。

「啓之助、啓之助」

まるで、家来でも呼びつけるように、またそこでこういったのは、蜂須賀家の永居ながいそうろ候う、竹屋三位卿であつた。

「諦あきらめてやろう。それほどまでに頼むなら——」

「お、では、つるぎ山踏破のこと、お見合せ下しますか」

と初めて、ホツとしたらしく答えたのは、阿波守、三位卿などとともに、昨年大阪表の安治川から、まんじまる丸まるでこの阿波の国元へ帰っている森啓之助なのである。

あの時、森啓之助は、脇船わきふねの底に一個の長持を積んで阿波へ帰った筈だ。その長持の中には、たしかに、川長かわちようのお米よねが隠してあつた筈——。

さすれば、あの多病薄命なお米も、今はこの阿波の国の人となつてゐる筈だが、啓之助は、そのお米の身をどう始末してしまったのか、人には、おくびにもそれを洩らしたことがない。

と——一緒に、あの時、かれは太守阿波守たいしゆからいつけられて、このつるぎ山の間者牢へ、俵一八郎と妹のお鈴を護送してきている。一八郎は、今なお、世阿弥のいる瘤山こぶよりまだ奥深い、一ノ森の山牢へ封じこめてあるが、妹のお鈴は、この冬の寒気に凍え死こごん

でいた。

で、啓之助は、以来、お船手^{ふなてがた}方の役目をおかねつつ、時々、このつるぎ山の目付役を仰せつかつて、月に一度ずつは、必ず山牢の様子を巡^{じゆんさつ}察することになっていた。

きようも、実は、かれは山目付^{やまめつけ}巡察の役目できていたのだが、そろそろ春めいてきたところから、食客の若公卿^{わかくげ}、家中のもてあまし者、竹屋三位卿が、なんでも同行するというので、はるばる、徳島の城下から、山支度と狩装束^{かりしようぞく}できたのはいいが、日置流^{へきりゆう}自慢^{まん}の竹屋卿の弓も、二、三日の小鳥追いに、あまり大した獲物^{えもの}がなかったので、すぐに飽きてしまった。

飽きたら先に徳島城へ帰るかと、啓之助が放^{ほう}つておくと、こんどは、まだ絶巔^{ぜってん}には氷^ひ原^{ようげん}もあろうというのに、蟻^{あり}の小道まで踏破^{とうは}しゆかねば、阿波守への土産話^{みやげばなし}にならぬといひだして、駄々^{だだ}な若公卿の本領を發揮し、さんざんに、啓之助をてこずらせてきたところであつた。

だが、この山牢のある近い所までくると、さすがに、森厳な冷氣と山氣^{さんき}があつて、きようは諦め^{あきら}ようと我^がを折つたので、啓之助は、はじめてホツと安心した。

で、ご機嫌の変らぬうちに、よろしく下山をすすめようと思つていと、不意に、森^{しん}

々とした空気を破って、

「山番ッ、山番ッ、山番はいねえか——」

とはるかな上で、絶叫するものがあつた。

「ヤ……?」

啓之助はハツとして、三位卿の顔をみた。三位卿も、木魂こだまにつんざいた今の声に驚いて、
姐まな板岩の上へ突つ立つた。

と——また一声。

「山番ッ——」という叫びが、高い木立の奥でしたかと思うと、
なり後はシーンとしてしまった。時鳥ほととぎすのように、それ

「何かあつたな? ……」

竹屋三位は、星でも占うらなようにつぶやいた。

「この山に、異変のある筈がございませぬ」

啓之助が否定した。

「イヤ、今の最後の声に鬼気ききがあつた。誰か人が斬り殺されたぞ」

「それは気のせいでござりましょう」

「啓之助、お前は兵学に通じておらぬから、話せない。人が殺される間際の五音ほど明らかなものはないのじゃ。たしかに誰か殺されている。イヤ、誰かではない。今叫んだ声の主が斬られた……」

いいも終らぬ時だった。

真上の細道から、血まみれになった山番の下士が二人、バラバラと転び落ちに下りてきた。三位卿の音声学もばかにはできない。啓之助は横顔を打たれたように、

「何事だツ」と、怒鳴った。

「おッ、お目付」

「ウム、いかが致した？」

「い、一大事です……」と息をかすらせたが、すぐ要領をいった。

「また、あの乱暴者が狂乱して、牢番の佐平の脇差を奪って斬り殺しました」

「えっ、斬った？」

と、おうむ返しにせきこむ啓之助の言葉尻を取って、三位卿は得意らしく、
「ム、斬ったろう！」と大きくうなずいた。

「で、どうした、彼奴は？」
きやつ

「佐平の声に驚いて、吾々が駈けつけてみた時は、もう柵を破っている切迫で」
さく せつぱ

「や、脱牢したか！」

「すわとばかり、組みつきましたなれど、なにせい、血刀ちがたなを持って上うへに、いつものような死物狂い、とても、二人の敵ではなく、みるまにあの柵際さくぎわから西谷にしだにへ向つて、身を躍らせてしまいました」

「ば、ばか！」と森啓之助、口ぎたなく呶喝どかつして、

「破牢して西谷へ飛び下りたのを見届けながら、空しく逃げ降りてくる奴があるか。合図なるこ鳴子は何のために備えてあると思うのじゃ。うろたえ者め！ 早く鳴子を引いて麓ふもとへ合図をしろ！ 早く引けッ、鳴子をッ」

「おッ」

と、蹴飛ばされたようにはね上がつて、

「そうだった！」と山番の一人、バラバラと彼方あなたの黄櫨はじの木の下へ駈けだした。

ヒラリと、その喬木きようぼくの下枝へ飛びついたかと思うと、猿ましろのようにバサバサと木の葉を散らして攀よじ登った。

登りつめた八分目の梢に、タラリと、一本の藤蔓がかかっている——、片手で幹に抱きついて、片手をそれへ伸ばした山番の下士が、力いッぱいグンと引くと、電波のような力のうねりが、喬木の梢から梢をへて、谷のあなたの山関へ届いた様子……。

かすかだが、物々しく、グワラグワラツと鳴った合図の音響が返ってくる。

下に立つて、仰むいていた啓之助は、それを聞きたしかめて下りようとする上の者を、

「待てッ」と手をあげて制止した。

「待て！　そして、しばらくそこで様子を観望しておれ」

「は！」と、虚空で返辞をする。

「見えるだろう、鞆橋の木戸が」

「うかがえます——、只今の鳴子合図に、手配の人数が動きだしました」

「ム、鬼淵の間道のほうは？」

「よく見えませぬが……」と樹上の居場所をかえて手をかざしながら——「オオ、駈け向つてゆきました、原土の方が十四、五名」

「鵜の平には？」

「見張が立った様子です」

「よし！」と森啓之助、うなずきを与えた。そして三位卿をかえりみながら、

「もう大丈夫——天魔鬼神でもこの山から踏みだすことはなりませぬ」と笑み^えをみせた。

「脱走を企てたのは何者か」

「御存じの、俵一八郎でござります」

「ウム、あれか」

三位卿は、安治川屋敷の雪洞^{ほんぼり}と、阿波守が手に持った、ほたる斬^ぎり信^{のぶ}国^{くに}の光を想い起こした。

「森様——」とまた、樹上から樹下へ、物見の山番が呼びかけた。

「おう、なんじゃ」と、声に応じて振りあおぐ。

「見つけたらしゅうございます。俵一八郎を、八方から一カ所へ、ワラワラと人数が集ま
つて行きました」

「そうか。手もなく捕えてしまったのであろう。では降りてもよろしい」と命令した。

で、啓之助は、すっかり不安を一掃したらしく、岩の上へ腰を下ろして、三位卿へ話を
向けなおした。

「あなた様もご承知でございましょう。鳩使いの天満浪人、倭同心と申した奴で」

「知っている。安治川のお屋敷へ妹を棲すみこませていた者じや」

「その妹の鈴も、この剣山に同獄しておりましたが、極寒ごくかんのうちに、凍死してしまいました。それ以来、一八郎め、ほとんど、野獸のように荒れ狂って無謀な脱走をくわだてますので、特に、山番二人と牢番一名をつけておきましたが、またもやこんな騒さわぎをしでかしました」

「自暴自棄じぼうじきになっているのだ」

「この分では、ただの山牢では不安心ゆえ、改めて、前神まえがみの森の石子牢いしころうへぶちこんでくれましょう」

「それほど手数のかかる奴なら、なぜひと思いに、首を打ってしまわぬじやろう」

「隠密は斬るな、終身山牢へ入れて鳴門の向うへは返すな、間者を斬ると徳島城たいたへ崇たりをする——というのは、義伝様ぎでん以来、破れぬお家の掟おきてでござります」

「そうそう、大阪表におった頃、そういう話を阿波殿の口からも聞いたことがある。そのために、十一年余りも、この上の洞窟に封じ込まれている甲賀世阿弥、あれはまだ存ぞんしよ生うでいるのか」

「生きているというのも名ばかり、まるで、うつせみかまゆを脱^ぬけた蛾^がのように老いさらぼうておりまする」

「道理で、この柵の中から上は陰^{いんしん}森としているな」と、その世阿弥が、流れをへだてた向うの柵ぎわに、ジツと身をかがめているとは知らずに、三位卿、なに気なくふりかえった。

その眼を避けようとして、世阿弥はあわてて身を引つ込めたが、おおいかぶさっていた山^{やま}笹^{やさ}やつつじの葉がガサガサと動いたので、

「や、何者か？」

と三位卿、身を屈して流れのうちから向うを睨^{にら}んだ。

啓之助もズーと柵ぎわを見渡したが、格別、異状がないので、気かけずに、

「山鳥か何ぞでござりましょう」と打ち消すと、

「おお、あんな所に」

「何をお見つけなさりました」

「わしが昨日^{きのう}射^いた流れ矢の先がチラと見える」

という声を聞いて、隠れていた世阿弥はハツと思つたが、もうなおのこと身を動かすこ

とはできない。

「あれは秘蔵の鷹の石打^{いしうち}じゃ。あとで誰かに流れを越させて、拾っておいてくれるように」

「承知いたしました」と、啓之助が答えるのと一緒に、竹屋三位、不意に、ヤツと叫んで小手をひるがえした。矢羽の先が浮いている木の葉の中へ、小柄^{こづか}を投げて試したのだ。

それでも、何のそよぎもしないので、かれは初めて心をゆるしたが、小柄を打ったはずみに、己^{おの}れのふところから金欄皮^{きんらんがわ}の料紙入れが落ちて、ズズズと岩の間へ^{すべ}入りこんだのを知らずにいた。

俱利伽羅坂^{くりからざか}の方から、にわかに、殺気だった人声がしてくる――。

精悍^{せいかん}な装いをした阿波の原士^{はらし}の十数人、一人の武士の両腕をねじとって、無二無三に引きずり上げてきた。それは脱走をもくろんで捕われてきた俵一八郎。見違えるほど痩せ細^{ほおほね}つて、頬骨^{とが}は尖り、目は青隈^{あおくま}をとったよう、眉間^{みけん}にも血、腕にも血、足にも血……。ふた目とみられぬ姿である。

「お、来たか」と森啓之助、バラバラとそれを迎えながら、

「いく度となく山を騒がす憎ツくい奴、こんどは前神の石子牢^{いしころう}へぶちこんで、身動きの

ならぬように致しておけ」

「石子牢？ 合点です！」と、あけび蔓^{づる}を輪にして提^さげていた一人の原土、流れへ寄つてザブザブとそれを濡らし、ピューツと手でしごいて紐^{ひも}のように柔らかくしたのを、「それッ」と向うへ投げてやった。

齒^はがみをしながら俵一八郎、見るまに、あけび巻きにされてしまった。その水気が乾くに従い、蔓^{づる}は針金より固くなつて、一分一分肉へ食いこんでいく一種の呪^{じゆばく}縛^{ばく}だ。

柵^{さく}の向うでは、甲賀世阿弥が、息を殺してこの無残さを眺めていた。かれの太股にも鋭い小柄が立っていた。――だが、今はそれを抜くだけの微動もゆるされない。世阿弥は、流れる血さえない傷口をおさえて、ジツとこらえつめていた。

阿波の国だけにあつた特殊な武家階級、原土^{はらし}という一族の中には、その頃までも、殺伐な野武士の血が多分に遺伝されていた。

蜂須賀家の家来であつて、家来の束縛^{そくばく}はうけていないし、無禄^{むろく}の浪士に似て浪士でもない。いわば、山野へ放ち飼いにされていた客分である。

領主の田数帳^{たかずちよう}にある以外の山地は、どこでも、かれらの自由所領とされていた。だか

ら、かれらは決して城下に屋敷をもっていない。みな、阿讃山脈あさんさんみやくの根から、四国三郎の流れに沿った奥深くに、土俗風な門戸を構えている。

その中には戦国以来の旧家もあり、天草の残党だという家もある。山を伐り拓きひらいて吉野川へ流す材木や、南国的な花の咲く長順煙草ちようじゆんたばこなどは、かれらの所領を富ますものであった。それでいて、皆ひとかどの武術に長け、スワ城下に喧嘩けんかでもあるとかいって、猛然と、かれらの群が、吉野川の流域を下る時は、ほうふつとして古の野武士だ。

その、気の荒い原士たちは、なんらの仮借かしゃくなく俵一八郎を引ッ立てて、前神の石子牢へぶちこんでしまった。石子牢というのは、一種の風穴かざあなで、穴の奥から冷たい風が吹いてくる上に、あたりの断崖からは、夜も昼も、たえずザラザラと小石の降る音がしている。一八郎をその中へほうり入れると穴の口へは、大石や小石をかこってほんの食物を投げ込まれるだけの余地を残した。これでよし、と森啓之助は、竹屋三位卿うながを促して、その日は麓へ下りてしまう。

翌日から、山はまた終日シンと静まり返っていた。石子牢に狂う一八郎の叫びも聞えなくなつた。

一日ごとに、太陽の熱度が昂たかくなつて、木や草ばかりがズンズンと伸びていった。静中

の動、なんらかの力がそこに鬱^{うつ}している。

だが——山は静かだ。

鬼気をひそめて静かである。

ところが、ここに不思議な現象が起こりだした。といつても、世間の巷^{ちまた}とは違うから、そう大した異変ではないが、この山としては少なくともひとつの変った現象には相違ない。それは何かというと、あれ以来、世阿弥の様子がにわかに生々^{いきいき}としてきたことだ。かれは、竹屋三位の小柄^{こづか}が自分の太股に深く突き刺さったにもかかわらず、山牢の前へ這い戻つて、ニヤリと、十一年目といつてもいい独り笑^{ひとえ}みを洩らしたのである。

「初めて知つた……。ウム、この山には、自分の他^{ほか}に、まだ一人の同志がいる……。何といったつけ、才俵一八郎、俵一八郎、かれはたしかに大阪表の天満組同心だ。あの様子では、ごく近ごろに、この山牢へ送りこまれてきたらしいから、さだめし、その後の消息に通じているだろう。なんとかして、あの一八郎と一度話をしてみたいものだ」

こういう希望が燃えだしたのである。希望は生命^{いのち}の火のようなものだ。希望のうすれる時には人は古い、希望の赫^{かつかく}々とする時には人は若やいでくる。

世阿弥は小柄^{こづか}の傷を癒^{いや}すために毎日、薬草の葉をムシつては、青い草汁を傷口へなすり

こんだ、そして柵さくから脱けうる方法と場所に苦しんでいた。

ひどく山の荒れた晩があつた。翌朝みると、一本の山栗の太木が、柵をくずして仆れていた。山番の者がそれを繕つくろひにこないうちに、かれはその朽木くちきを引き入れて、草むらの中に隠しておいた。

春の夜も、山荒れのあと二、三日は、冬のような月の冴さえ方をしていた。世阿弥は真夜中ごろになって、獣けもののように、間者牢から這いだした。

かれは、青白い月魄つきしろをあびて、鬼のように働いた。やがて柵に攀よじて外へすべり出したかと思うと、世阿弥は、隠しておいた朽木を激流の岩に架かけて、飛沫しぶきのかかる丸木の上を這つて渡つた。

「俵殿、俵殿……」

やつと尋ねあてた石子牢のぞを覗いて、こう呼んだのは世阿弥である。パラパラパラ崖がけから小石が降っている。その断壁面だんぺきめんの荒い岩肌に、藤の森から青い月がさしていた。

「一八郎殿……」と、もう一度、石と石との間をかき分けて、世阿弥が声をかけるとややあつて、

「うウ……、た、たれだ！」

と風穴の中で物音がした。——物音はしたが、一八郎もこの深夜に訪れたものを深く怪しんだとみえて、めつたに穴口へ顔を寄せてこない。

「俵一八郎殿……。わしは甲賀世阿弥と申すものでござる。阿波の者ではござらぬ。十一年以前からこの山牢に封じこまれている世阿弥と申す幕府の隠密でござる」

「やツ、世阿弥殿？」

「ご承知か」

「知っている！」と、一八郎、青白い顔を石の間からさし出した。世阿弥は、妖鬼に睨まれるような凄さをおぼえた。

「ウーム、なるほど。いかにも世阿弥殿であつた。たしかにそこもがこのつるぎ山にいるとは存じていたが、どうしても会うことができない。それゆえ、わざと、柵を破つて山を騒がせ、そこもとの気がつくように致していたが……。ああ、とうとうお気づき召されたか」

「や、では脱走する目的ではなくて？」

「なんで。——この山さんきょう峡を脱走したとて、四面は山と海との二十七関、とても逃げお

おせぬことは某も心得ている」

「うむ、仰せの通りじや。土佐境も讃岐越も逃げ道はない」

「しかし、お目にかかればもう本望でござる。世阿弥殿、一言お告げいたしたいことがある」

「オオ！」と顔を寄せあうと、二人の間へ、ザア——と箕を開けたような砂礫が落ちてきた。それをかき落して、また穴口を作りながら、甲賀世阿弥。

「わしも、お身に会ったなら、何ぞ消息が聞かれようかと、それ一念で、山牢の柵を破つてまいったのじや。して、わしに告げたいことは」

「江戸表におらるるそことの御息女お千絵殿という方から便りをもって、唐草銀五郎というものが、阿波へ入りこむべく大阪表までまいりました」

「オオ、さては、唐草が娘の消息をもつて阿波へまいりますとな？」

「さ、ところがその銀五郎は、目的の途中で、あえない最期をとげたのでござる。場所は、大津の禪定寺峠。——某もまたその時に、阿波の侍のために捕われて、とうとうここへ送られてまいった。しかし、御落胆なさるな、まだ安治川屋敷に押しこまれている当時、手前の妹の鈴が探ったところによると、われらと同腹の者で天満組の目明しをしている万

吉と申す者が、法月弦之丞という人^{じん}の力を借りて、再度、阿波へまいる支度のために、お千絵殿を尋ねて行つたということでござります……」

「はて？ ……法月弦之丞と申せば、わしが江戸表にいた当時は、まだ十四、五の美少年で、夕雲^{せきうん}流^{りゅう}の塾へ通つていた大番組^{おおばんぐみ}の子息——。どうしてそれが、娘の千絵を存じているのであらう」

「二人は恋の仲だそうでござる」

世阿弥は不思議な気がした。かれが、夢にみるお千絵は、いつも彼が江戸を去つた時のおさないお千絵であつたから……。

「なるほど、もうそんなこともありそうな年頃。では、ついでもって何うが、その千絵女のほかに、お綱と申すものの消息をお知りなさるまいか」

「お綱？ ……それはまた何者でござりますな」

「実を申すと、母違いの娘でござるが」

「ひと頃、大阪表を立ち廻つていた、女スリの見返りお綱という者はござつたが？ ……」

「いや、それは全く別人じや」

「無論、そのお綱ではござりますまい。だが、ほかにはお綱というような名は、誰の口か

「さも聞いたことがなかった……」

「ないのが当然でござろう、親子しんしじょうの情、お笑い下さい」

「しかし世阿弥殿。ただ今お告げした通り、弦之丞殿が江戸へついたあかつき暁には、さだめし、それらの消息や、また公儀の旨をふくんで、いつかは一度、この山牢へも訪れるものと察しられる。必ずともそれを信じて、気を落さぬように」

「十一年ぶりで、初めてその吉報を聞きますわい。そうあればお手前もなおのこと、御短気をなされずに、阿波の密謀が公となつて、幕府よりお救いのある日をお待ちなさるがよい」

「ところが……」と、一八郎は暗然として、

「それがし某の命は旦夕たんせきに迫っています。それで……」

といいかけるうちに、もう彼の面おもてには、ありありとした死相がうかんでいた。

そこへ山番のしわぶきがきこえてきたので、世阿弥は、一八郎のいった意味を「なぜか？」と問い返してみる隙もなく、石子牢の前を離れて駆けだした。

森をぬけて断崖に出で、藤蔓ふじづるにすがりながら瘤山こぶやまの裾すそへ戻ってきた。そして、朽木

丸太を架けておいた所へ出るまで、流れぎわの岩石と水草の間を這つてくると、何やら、妙なものがフト指先にふれた。

さわつたと思うと、それが岩の間へ、スルリと這つて行つたので、あわてて拾い取つてみると、月明りでしかとは分らないが、どうやら古風な懷紙挟みで、金欄革の二つ折り、旅用とみえて懷紙以外なものが厚ぼつたく挟んである。

「分つた、これはあの竹屋三位が持ちものであろう」

世阿弥は、格別役にたつものとは思わなかつたが、そのまま、ふところへ入れて、以前の所から激流を渡つた。

そして、後に疑いを残さぬように、朽木を流れの中へ突き落とすと、パツと白い水煙をあげて、その丸木が大蛇のように浮かんでゆく。

で、無論、世阿弥が柵を出て、石子牢にいる一八郎と話をまじえたなどということは、山詰の役人、誰一人として気がつかなくなつたが、永らく蟄伏していた世阿弥の心は、その日から、俄然と眼をさまして一縷の望みを江戸の空へつないだ。

「わしがここにいるということは、まだ世の中から忘れられていなかった。今に！ 今に！ 誰かくるに違いない」

こういう信念をもったのである。

「しかし？ ……」と冷静になつてみる時に、世阿弥は、それもまた、あまりにはかない
 凡情ぼんじょうにすぎないのではないかと疑つた。

単なる人恋しきから燃える希望ではないかと反省した。

幾多の危険を冒おかして、ここへ訪ねてきた者に、この姿を彼に見せ、彼の姿を自分が見た
 ところで、果たして何の意義があろう。やはり、それも一つの夢想到に過ぎない。一時の煩ぼ
 悩のうを、よろこばせ、涙ぐませるだけのことではないか。

——とも思うし、いやいや、そうではないとも思ひなおした。

この厳しい密領へ、命がけで忍んでくる者があれば、それは、必ずや大きな意義をもた
 らすものか、求めに来る者でなければならぬ。

宝暦変以来、密雲につつまれてゐるこの国の内秘。その謎をとき、その秘密の鍵かぎを握つ
 ているのは自分だ。

法月弦之丞とやという者、また、天満組の万吉とやという者が、ここへ来る日があると、
 俵一八郎がいったのは、そうだ！ その鍵を自分へ求めに来るのに相違ない。

永い山牢生活に、自分はあまり愚に返つていた。ただいたずらに、江戸へ残してきた二

人の娘の愛情にばかり囚とらわれていた。

本来、自分がこの阿波へ入り、こうした運命を招いた時の使命はなんだったか！ 鳴門の渦うずと剣山の雲に蔽おほわれていた徳島城の大秘密をあばいて、天下をアツといわせようという壮図そうとに燃えていたのではないか。

老いたものだ。甲賀世阿弥も、いつのまにか焼やきが廻った。その頃の元氣を思うと恥かしい。

そうだ。支度をしておこう！

いつ何人なんびとがこの山を訪れても、すぐに、自分の探っておいた限りの言葉を、その者へ、手渡すことができるように。——よしや、それが無駄になるまでも。

かれの思慮は、ここへ、ピッタリと落ちついた。

死花しにばなだ！ 死花だ！ と彼の心は躍ってくる。徳島城内のかずかずの密謀や、歴々と、

阿波一国にみなぎっている反徳川の風潮を、十分に探っていながら、この終身牢に枯死こししてしまう運命であったものが、誰かの手で、江戸城へ届けられるとすれば、その甲賀世阿弥に死花が咲くわけである。

虫のごとき死をまぬがれて、人間らしい死を遂げることができる。

で、世阿弥はその支度をしようとした。

しかし、ひるがえつてみると、この山牢の中に、悠々と、そういう記録などを書き残しておく、筆墨ひつぼくなどはない筈である。

「はて？ ……」と、その方策に腕をこまぬいた時、かれは、岩の間から拾ってきた、竹屋三位みの懷紙入れを思いうかべて、中を開いてみる気になった。

別にこれぞという物もなかったが、その懷紙かいし挟みの中に、一帖じようの絵図がしのばせてあった。

小形こがたな法帖ほうじようみたい折り畳みであるので、サラリと押し開いてみると、竹屋卿がわらじがけで実地を写したものらしく、徳島城の要害から、撫養むや、土佐泊どまり、鳴門のあたりを雑に書きかけてある海図だった。

だが、世阿弥の目には、それが書き半端はんぱな海図とのみ単純には看過されなかったとみえて、

「お、これは、軍船の配りや布陣の線を引いたものじゃ。や、鏡島かがみじまの袋漕ふくろがた——鳴門の裏海には、いつのまにか、こんなにも多数の軍船がひそめてあつたか」

と、図面の角点を数えて目をみはった。

「よいものが手に入った。これも、一つの証拠にはなる。しかも、公卿^{くけい}方の者が自写したのは、何より有力な証拠品である。ウム、そうだ、これへ自分が隠密して探り得た箇条を書き加えて……」

ひとりうなずいた甲賀世阿弥は、ふすまに使っている鹿の毛皮をとりだし、また、瘤^{こぶや}山の窪^{くぼ}みへ下りて、手ごろな篠^{しの}を切ってきた。で、何をするのかと思うと、この間、太股^{また}へうけた一本の小柄^{こづか}を細工^{さいく}刀^{がたな}として、斑竹^{ふちく}の細い尖^{さき}を切り落し、鹿皮^{しかがわ}のワキ毛をむしって、一本の細筆^{ほそくで}を作ったのである。

さて、筆はできたが、墨汁を何から得よう。

かれはまた、草木の中を歩いて、紫、藍^{あい}、紅^{べに}、さまざまな花をもんで試みたが、どれも日光にあえば色を失うのみか、筆にかかる粘^{ねんりよく}力^{りき}がない。

その中でも、割合に色素のありそうな、ぎらん草の花を選んで洞^{ほら}へ帰った。そして紫色の汁を絞り、指を噛んで、自分の血汐をタラタラとそれへ注^{そそ}ぎまぜた。

岩を机^{とこ}とし、獣油を灯し、かれは、さながら大蔵^{だいぞう}経^{きやう}を写しにかかる行者のごとく、端然^{ほんぜん}と洞穴^{ほらあな}にこもって、自分の血とぎらん草の汁へ筆をぬらしはじめた。

そして、竹屋三位が鳴門水陣の線を引きかけてある、あの折帖おりちようの余白へ、きわめて細い字で、ポトリと五、六字書いた。

書けた文字をジツとみつめていると、血と紫むらさきばなの花の汁がうまく混和して、墨よりも強い、玉虫色の光沢をおびてくる。

「これでいい」

と、世阿弥は額ひたいを抑えた。

遅々とした筆が運ばれだす。

灯ともしがつきれば獣油を足し、筆が渴かわけば指の血を絞しぼって……。

だが、筆にふくませる血液も、やがて、指からはしたたらなくなって、かれは、五体のいたる所を小柄で破った。

*

*

*

煙草船たばこぶねや藍玉船あいだまぶねが、白い帆を張って、ゆるゆると吉野川を遡すべってゆく。

その底には、もう若鮎わかあゆがチラチラ光っているだろう。南国らしい黄花こうかの畑、変化に富んだ兩岸の風景もかくべつだが、何よりはその大河の、砂と水のきれいなことといったらない。

きれいなといえ、水も水だが、アレをごらん、あのかんこ船に乗って、こつちへ上つてくる御新造様は、いづれ御城下のお方だろうが、なんというお美しいことだろう——と、藍取歌を唄っていた陸の娘が見とれていた。なるほど、この山水の紅一点。今——西に麻植の岸へ船をつけて、スラリと、そこへ下りた美人がある。

阿波にはたくさんに美人がいるが、あの豊麗な、肉感的な、南国色の娘たちとは、これはまた、クツキリと趣をかえた美人。

太夫鹿の子の腰帯に、裾を上げて花結びにタラリと垂れ、柳に衣裳をかけたようななよやかさは、東風にもたえまいと思われるほど、細ツそりとした形である。

「宅助や……」と、うしろを向いて、

「うつとうしいから、お前、これを持っていておくれでないか」

紅緒の萱笠を下郎に渡すと、うけたお供の仲間間は、それを自分の笠に重ねて、

「へい。もうお近うございますよ」

と、南の空をふり仰いだ。

剣山がそびえている。

「ここから、もう何里ぐらい歩いたらいいの」

「さア、私もこんな奥へ来たのは初めてで、よく見当はつきませんが、川島郷から湯立ゆだち船戸ふなと、ザツと四、五里も歩いたら、穴吹口あなふきぐちへ着きましようか」

「そこが、あの山の麓ふもとかね？ ……。まだずいぶんあるらしいが、どこかに駕屋かごやでもないかしら」

「へへへへ、お米様よね。いつまで大阪表にいる気じや困りますぜ。ここは阿波の国も吉野川のグンと奥、そんな物があつて堪るものじやございません」

くいつめ者もの

仲間ちゅうげん づれの旅の女は、静かな大河に沿った道を、上かみへとって歩きだした。

豆の花が飛ぶかとばかりに、たくさんな蝶が舞っている。群蝶にくるまれて行くうしろ姿が、目を吸われるほど美しい。

「そんなことをいうけれど、お前……」

仲間風情ふぜいへ話しかけるには、もったいない笑えくぼをみせて、

「立派な乗物はないだろうが、山駕やまかことかいうものぐらいはあるだろうに」

「そりや、ない訳わけはございますまい。第二、馬ならたしかにお間に合せ致します」

「人をばかにおしでない」

ちよつと睨にらむまねをして、

「在所のお嫁さんじやあるまいし、誰が、馬へのるなんていったえ」

「お怒りなすつちやいけません。だから、乗物はないと、まっすぐに申しあげているんで」
「お前は私をなぶるから嫌いさ」

「エエ、どうせ嫌いは分っております。なにしろ大阪表にいた頃から、この宅助たくすけは、仇か
役たきやくにばかり廻まわつておりましたからね」

「ずいぶん私をひどい目に会わせました」

「またお怨みうらみでござんすかい」

「一生忘れやしませんとも」

「じよ、じよだんじやねえ！」

と仲間の宅助、下司げすらしく頭を搔かいて、

「そのお怨みはお門かどちが違いでござんしよう。ねえ、主人持ちのかなしきに、わっしはただ、
いいつけられたことを真ッ正直に承るだけのこつてすぜ。命がけで安治川の渡船場から、

お前様を引ッさらつてきたり、長持の底へ入れて綱倉つなぐらの番人をしたり、ずいぶん口くでもねえことはやりましたが、その揚句に、思いを遂げて、うまい花の汁を吸ったのは、すなわち、手前のご主人様——怨むなら、その森啓之助様をお怨みなさいまし」

「知らないよ……」

「そう、早くお歩きなさいますと、またすぐに息が喘きれますすぜ」

「——お前も怨むし、啓之助様も私は怨む……。ああ、こんな国のこんな山郷やまごを歩こうとは思わなかった」

「いけねえいけねえ。そういう溜息ためいきがでた後は、いつでもきまってお体が悪くなる。気をかえて、雲雀ひばりの声でもお聞きなせえ」

「思い出すと腹が立つもの……」

「まあよろしいじやござんせんか。これが、大江山へでもさらわれて、酒顛童子しゅてんどうじのようなやつを亭主にしたというのなら、そりや諦めあきらもつきますまいが、城下端はすれの小粋な寮へ納まって、お化粧料けしやうりようもタツプリなら、遊山ゆうさんやぜいたくもしたい三昧さんまい、森啓之助様の思われもので、お米の方様というお身分は、決して悪い仕合せじゃございませんぜ」

この仲間ちゆうげんの粘り舌ねばが、少ししつこくなってきたので、傷つきやすい旅の心は、急に

女を憂鬱にさせた。

もう、いわずもがなのことだが、この瘦形やせがたの美人こそ、去年の秋まで、大阪の立慶河りつけい岸がしにいた川長かわちようの娘お米よねであつた。

連れているのは啓之助の仲間、お米を阿波へ運ぶ時に、骨を折つた宅助である。二人の口ぶりから察するに、お米はその後、心ならずも、啓之助の意に従わねばならぬ、余儀ない境遇に落ちてゐるらしい。

だが、その心の奥底には、当然、まだ啓之助の腕では、ねじ伏せきれないものがあるだろう。

それが二人の会話にチラチラ出る。弱い女の不平と反抗だ。けれど形の上では、もう誰が目にも、お米は啓之助の圀かこい女もの、宅助はその番人という態ていになつてゐるのを否認ない。

ただ、幾分か、お米にとつてよろこぶべきことは、あの癆咳ろうがいの病のかげが、大阪にいた頃より大層よくなつてゐることだつた。瞼まぶたのあたりの青いかげや、病的であつた頬ほの肉に艶くつや、それがズツと健康らしく見えてきた。

環境が變つたからであらう。

お米の囲かわれてゐる寮かいきのあり所が、海氣と松風に恵まれてゐる地に相違ない。

黙つて歩くと道が遠い。

何の用向きをもつてきたのか、指して行く剣山の麓^{ふもと}までは、まだなかなか道のりがありそうだ。

「こいつはいけねえ、とうとうこじれやすいお米をこじらしてしまった」と、仲間の宅助が後からテクテク供をしながら、少ししやべりすぎたかなと後悔した。そして、何とかひとつご機嫌をとり結ばなくっちゃ……と思つていると、

「おうい——」と、突然。

うしろのほうから遠呼びに手を振つてくる男がある。

「おーい」とまた一度呼びとめて、こつちへ急いでくる者をふりかえると、顔は見えない、一文字の笠、ヒラヒラするのは縞^{しまが}合羽^{つば}だ。

「誰だろう。こんな所で呼ばれる者はない筈だが……」お米が少し気味悪げに道をよけていると、程もあらず、そこへ追いついてきた一文字笠の男は、

「もし、川長のお米さん」

と、いきなり、^{ずばし}図星をさして、^{かっぱ}合羽の片袖をうしろへはねた。

帯の間の手拭をぬき取り、口を歪めながら、生え際の汗を拭いている顔を覗いたが、お米にも宅助にも、どうも覚えのない男だ。

「私をご存じのようだけれど……お前さんは？」

「お忘れでございますか」

「さア……どうも」

「去年の夏の初め頃は、立慶河岸へ屋根舟をつけて、よくお前さんの家の、川魚料理を食べに行つたものですぜ」

「ああ、それじゃ店のお馴染みでございましたか」

「なアに、馴染みというほどでもねえが、お十夜孫兵衛という男と、飲み仲間によく一座したことがある」

「それを聞いて思い出しました。ではあなたは住吉村にいた……」

「そうよ、あの頃ぬきや屋敷に住んでいた甲比丹の三次という者だ」

「まア、人というものは思いがけない所で逢うものでございますね」

「冗談をいいなさんな、読本の筋じやあるめえし、こんな四国の山奥で、バツタリ行き逢つたり何かして堪るものか。実はお前の尋ねてゆく人に俺も少し用があつて、この通り

の汗だくで追いついてきたのよ」

「私の尋ねてゆく人って？ ……」

「トボけちゃいけませんや、お前めえさんの旦那様だ」

お米はほろ苦い顔をした。

仔細をきくと、甲比丹の三次は、去年以来、禁制の密貿易をやるぬきやの仲間とちりぢりばらばらになつて、諸方の港場を流れていたが、うまい仕事も見つからないので、これから尋ねてゆく森啓之助に、身の振り方をつけて貰うのだといった。

「なんだい、この虫ケラは？」

と側そばにきいていた宅助は、その虫のいい言い草と、三次の図太い面構えにあきれている。お米とすれば、もと大阪の店へ来つけた客ではあり、啓之助とこの男と、どんな関係があるかないかも知らないので、話に釣られながら、肩を並べて歩きだすよりほかなかった。

「ふざけた野郎だ」

虫の納まらない仲間の宅助、後から来て先へ立った甲比丹の三次へ、突ツかけるように、

「おい！」と声をかけた。

「なんでえ！」語気が同じに弾はすんでくる。

「どこへ行くんだ、てめえは一体」

「今もいったとおり、森様へ用向きがあるんだ。城下のお屋敷をたずねたところが留守、じゃテツキリと思つて、お米さんの妾宅へ行つたところが、そこも留守だ。で、だんだん探つたところが、吉野川を舟でお前^{めえ}たちが上つたということが知れたから、ヤツとこうして道づれになれたてえものよ」

「だが、ちよつと待ちねえ。うちの旦那は、お前^{めえ}のような者たあ知合いがねえ筈だぜ」

「向うで知らなくつても、こちらさまはよくご存じの者だからしかたがねえ」

「しかたがねえという法があるものか。どこの馬の骨だか牛の骨だか分らぬ者に、なんで旦那が逢うものか、はるばる行つてみるだけ無駄骨だ」

「ご親切はありがてえが、よけいなことはいつて貰^{もら}うめえ」

「なにを」

「およしッ——宅助」お米はあわてて目で止めた。この人^{ひと}気のない山郷^{やまご}で、間違ひでもあられた日には、女はどうする術^{すべ}もない。殊に、隼^{はやぶさ}のような三次のまなざしをただけでも、そんな手軽いコケ脅^{おど}しに怖^おじて、後へ引つ返すような生^{なま}やさしい食いつめ者でないことは分り過ぎている。

それよりは、一刻も早く、啓之助や原士^{はらし}たちのいる剣山の麓^{ふもと}へ辿^{たど}りつくことを急いだ方がよいと、お米は息ぎれをこらえつづけた。

つるぎ山の麓口に、原始的な一部落がある。巨大な石材や自然^{じねん}木^{ぼく}の柵^{さく}に囲^{かこ}まれている建物は、原士の詰めている山番所、その向うに目付屋敷が見えた。その附近に散在しているのは、つるぎ山を見廻^{こもの}る小者小屋や、土佐境^{とさぎかい}の関所へ交代してゆく山役人の溜^{たま}りなどである。

陣屋門みたいなその出入り口へ、今、足を引きずって来たのはお米と仲^{ちゆう}間^{げん}の宅助で、もうこの辺へ来て四方を仰ぐと、綱^{つな}付^{つき}山^{さん}、赤^{あか}帽^{ぼう}子^し岳^{だけ}、丸^{まる}笹^{ざさ}の峰^{みね}などが、白雲の上に巨影をみせているので、まったく、山奥へ来たという感じが深い。

「もうここまで来れば、日が暮れようと、雨が降ろうと、安心なものでございます。どれ、とにかく、取次を頼んでみましょう」

と、宅助がつかつか門^{もん}際^{ぎわ}へ寄つてゆくと、前後してきた甲^か比^ひ丹^{たん}の三次が、もうそこにいた組子の者に、腰をかがめて何かしゃべっている。すると、

「さようか、では、しばらくそこに待っておれ」

と一人の小者が奥の目付屋敷へ入って行った様子。三次は、なれなれしく門小屋の土間^{どま}へしやがみこんで、煙草^{たばこ}入れをとりだしていた。

「恐れ入りますが、ちよつと、お願い申します」

こんどは宅助が揉^もみ手をして行つて、

「御城下からお出張^{でばり}になつてゐる、森啓之助様へお目にかかりたい者でござります。どうぞお取次を願います」

「その森啓之助様なら、只今、同役が知らせに行つたよ。しばらく待つておいでなさい」

「いえ」宅助は、わざと三次へ目もくれないで、

「そこにいる者とは違います。手前は、啓之助様の召使なので、へい」

「ああ、同行してきた者ではないのか」といつてゐるうちに、奥の目付屋敷の方から、森啓之助の姿がこつちへ向いて歩いてきた。

「誰^ほじゃ、この方^{ほう}に密用^{みつよう}があると申してまいつた者は？」と啓之助、そこへ来て見廻すと一緒に、すぐと、門のかげにチラと見えたお米の姿に気づいたが、わざとそれを後廻しにして、組子^{くみこ}にたずねた。

「ええ、啓之助様、その甲比丹^{かびたん}の三次はここにあります。どうもまことにお久しぶりで」

「はて、そちは？ …… いったいどう覚えがないように思うが」

「こんな山の中だから、思いだせないのでございましょう。あなたもお船手組ふなてぐみの森様、わつしも密貿易船ぬきやぶねの三次です。お互に水の上で顔を合せりや、ああ、あの時のあの野郎かと……」

「うむ、わかった、あの三次か」

「折り入って、お願いがあつてまいりやした。誰か、お美しいお客様もあるところ、長いお邪魔はいたしません、ちよつと、しばらくお顔を貸していただきてえと存じますが」

啓之助は、下らぬ者を取り次いだ、組子くみこの愚鈍を腹立たしく思ったが、何となく、脇の下へもたれこんでくるような三次の口ぶりを、強くはね返してもまずいかと考えたらしく、「そうか、では目付屋敷の、執務所しつむじょの縁がわへ行つて控えているがいい。何の用事かしらぬが、後からまいってきいてやる」

「ありがとう存じます。やれやれ、これでわつしもホツと致しやした。何だツて、この山奥まで尋ねてきて、面会は相ならんなどと、木戸を突かれた日にや御難ごなんですからネ」

脱いだ合羽を片腕に垂らして、お米のほうへ目をくれながら、自然石じねんせきの石段のぼを上つて、向うの役宅の庭へ廻つて行つた。

と、啓之助は、それを待ちかねて、すぐに門の外へ出た。そして、サッサと向うの樹蔭^{こかげ}へ行つてから、お米を目でさし招いた。

「どうしたというのだ、お前は？ 勝手に出歩いてはならぬというのに、このような役向きの所へ何しにきた。また、連れてくる宅助も宅助じゃ」

こう咎^{とが}めたが、啓之助の挙動^{きようどう}は、むしろ、お米が不意に來たよろこびに、落ちつかないほどなのである。

誰にも内緒にしている匿^{かく}し女が、役向きの出先へ不意にやつて來たので、啓之助は、こそぐつたいよろこびと舌打ちしたいような困惑を感じた。

目付屋敷には、まだ竹屋三位がいるので、そこへ曰^{いわ}くのあるお米を連れこむことはできないし、逢^{あい}、曳^ひのように外でひそひそと話しているのは、なおさら外聞^{がいぶん}にかかわる。

で、自分が案内して、附近の家へお米を待たせておき、口を拭いて、目付の執務所へ帰つてきた。

啓之助が使用している机の側から、煙草^{たばこ}盆^{ぼん}を煙管^{きせる}の首で引ツかけて、その縁側に腰をすえこんでいた甲比丹^{かぴたん}の三次。顔をみると狎^なれツこい態度で、

「ああいう美女たばをこの山奥まで逢いに来させるなんて、旦那も、なかなか罪づくりでございますね」と、啓之助にとつては、すこぶる不愉快なお追ついで従しやう笑しやういをした。

「そんなことはどうでもいいが、三次とやら」

「やらはござんすまい……ご存じの仲で」

「揚げ足をとるな。多用な役宅のことじゃによつて、用向きの次第、簡単に承ろう」

「簡単にね、結構でございます。じゃ手ツ取り早く申しますが、森様、まことにご迷惑じやございましょうが、ひとつ、わつしをお船手ふなてか何かでお使いなすつて下さいませんか」

「では、何か、貴様は雇やとわれ口を求めにまいったのか」

「至る所を食い詰めましてね、もうこの阿波よりほかにや、のんきに暮らせそうな所はねえんで」

「それは断ことわる。殊に、お船手の水夫かこも、今では他国たこくもの者をお召抱えにはなるまい」

「じゃ、それはよろしゅうございます。断られて引つ込むことに致しやす——。その代りにですね、森様、たとじやございせん、千両といいてえが、その半分ほど、ご拝借願いたいと思いますが、どんなものでございましょう」

「な、なにをいうのだ」

「お金を貸してくれという話なので」

「そちは正気でないに見えるな。暴言を吐くにも程があるぞ」

「程があると思うから、千両欲しいところを、こつちから五百両と負けて出ているんじゃないですか。安いもんでございます、何とか算段をしておくんなさい。それもサ、何もお前さんの自腹じばらを切つて出せという話じゃねえ、蜂須賀家のお金蔵かねぐらから、威張つて引きだせる筋のものです」

「だまれ！ 蜂須賀家の公金を、たとえ一文でも、貴様のような奴に下さる筋があらうか」

「出ねえものを取ろうとして、無駄骨を折るような三次じゃございません。じゃ、そのところを、チョッピリ耳こすり致しますが、蜂須賀様じゃ、また近頃、だいぶ精を出して、

火薬を買い込むつて話じゃございませんか——あの天下御法度ごはつとの戦いくさ薬ぐすりをね。そりや、

何かに要いるからでござんしょうが、廈門船アモイや西班牙船スペインから長崎沖で密買した火薬を、この

阿波ゆきの由岐港に荷揚げをしてコツソリと、渭いの津つの山へ運びこむつてえ噂が、もっぱら評

判でございますよ、といつても、色をかえて、びっくりすることはございません。その評

判は海の上のことで、まだ怖い江戸城の親玉へまでは知れていねえ話ですから」

「……………」無言でいるうちに、啓之助の色が青くなつてきた。この獰猛どうもうな男の毒ッ気どけ

にあてられたのだ。そして彼は四、五年前にも、新鋭の銃器何千挺を、外船から密輸入した時、その折海の上で働いていた密輸入仲間に甲比丹の三次という名が重きをなしていたことを思いだした。

「もうよいなおしやべりは止めましょう。わつしも、楽に食えている身分なら、御無心なぞにやまいりませんが、去年、住吉村の巢を荒されちまった後、どうも運の悪いことばかりで、食うや食わずの手下が五、六人も、口を開いて待っているんです。どうぞ何とかお助けの方法を講じてやっておくんなさい、でないと、わつしは我慢いたしますが、空ッ腹まぎれに乾分の奴が、御当家のことを、どんなふうにも世間へ吹聴するかもしれませんので」

「これこれ三次、貴様は何か思い違いをしているらしい、そりや何かの誤聞であろう」

「冗談いっちゃいけません、永年潮風に吹かれている密輸入の三次、海の上のことなら迅風耳だ！　じゃ、こんどはお前さんの手相を一つ見てやろう」と、片あぐらを抱えこんだ三次は、テコでも動かぬ面構えをして、啓之助の顔をジツと見ながら、

「あー、お前も少し密輸入をやったことがあるな。しかも、そいつア美しい生物で、イヤだと泣くのを手込にして、お関船の底へ隠し、他領者を入れちゃならぬ御城下へくわえ

こみながら、殿様の目をかすめているという人相だ……」

と、啓之助をゆすつていっていると、どこからか、ヒュツ——と風を切つてきた矢が、三次の喉^{のどぶえ}笛を貫いて、白い矢羽^{やばね}を真ッ赤に染めた。

白^{おしろい}粉くずれ

ひどく酒の醗^{はっこう}酵^{におい}する香がすると思うと、そこは山役人の食料や調度の物を入れておく納屋らしく、裏の土間に、咽^むせるばかりな酒^{さか}樽^{だる}が積んである。

お米^{よめ}は、その薄暗い一間^まに、いつまでも待たされていた。もとより裝飾も何もない部屋なので、夜になることを思うと、急に心細くなった。それに、家の中に蒸^むれている酒の気がたまらなく鼻をついて、香^{におい}だけでも酔いそうになった。

それとは反対に、宅助は、冷酒^{ひや}を酌^くんで、五、六杯も盗み飲みをした揚句、いつか、裏土間の藁^{わら}の上へ、高^{たかい}斟^{びき}をかいて居眠ってしまった様子。

重い戸の開^あく音がした。啓之助が入ってきたのである。真っ青な顔をして——。

「お米……」

「旦那様ですか」

「ウム、どこにいるのじゃ」

「こちらの部屋でございます」

「あ、そこは、納屋番が夜寝る所じや、その廊下の奥がよい」

「どこも同じじやございませんか。ほんとにひどい旅籠だこと……。ああ、この天井板のない屋根裏を見ていると、大阪表から来た時の、怖かつた船底が思いだされます」

「ばかな」

かれも、それをいわれることは、古傷ふるきずにさわられるような気持がすると見えて、舌打ちをしながら、お米の側へ来て坐った。するとお米は、「あら……」と、後ろへ手をついて、

「血が……あなたの袖に、ま、耳のところへも、なまなましい血が……」と目をみはった。いわれた所を撫なで廻まわして、掌てのひらについた色を眺めながら、

「なんでもない」

「どうなすつたのでございます」

「甲比丹の三次の血だよ、わしの身から流れた血ではない」

「え？ ……あの三次を、殺したのでございますか」

「竹屋三位が矢をもつて射殺したのだ。あの居候殿は、人を殺すのが好きで困る」と、かれは血におびえた心のうちで、三次の手下どもが、火薬一件や自分とお米のいきさつなどを、世間に流布せねばよいかと案じていた。

お米もまた、啓之助の頬へ、ベトリとつぶれた血糊ちのりのかたまりを見て、にわかに、胸がムカムカとしてきた。この国へきてから、しばらく忘れていた血痰けつたんが、胸のどこかに、時機を待つて鬱滞うつたいしているのではないかというような神経を起こしたりした。

「陰気だな、この中は」

「早くお話をして、私は、今日のうちに御城下へ帰ります。こんな所に、一晩夜を明かしてはいられません」

「ばかを申せ、今頃から帰れるものか」

「でも、いたたまれやしませんもの」

「一体、何用なにようがあつてまいったのだ。こういう山家やまがということ存じながら、来たほうが悪いではないか」

「実は、急に、お願いがありまして……」

「また、大阪へやってくれということか」と苦ッぽい声の下から、針のような筋が啓之助の眉に立った。

「エエ……」

先にいわれてしまったので、お米はうつむきながら、かすかに、哀れッぽい声をかすらせた。そして、来る途中で巧みに織つてきた作りごとが、グツと喉につかえてしまった。

「何度いおうと、いけないといった以上、ゆるすことはできないのじゃ。もう四、五年もたったらやってくれる、それまでは大阪へ帰ることはならぬ」

「帰るとおっしゃいますけれど、決して、もう、大阪へ行つて、戻らないというのではございせん、すぐにまた阿波へ」

「いけないといったら！」

「だって、そ、そんな……」

「くだいッ」

「そんなこと、む、無理でございます」

「ちイツ、くだいというに！」

いきなり啓之助が、お米の頬を打った時、お米は、ワツと泣いて、

「口惜しい、わ、わたしは、こんな所へ手込に連れてこられた上に、お母さんが死んでも家へ帰られない」

涙がこぼれてくると、胸につかえていた空言までが、苦もなく、真実そうにスラスラ口へ出てきた。

お米の怨みがましい泣き声をきくと、啓之助はまたかというような舌打ちをして、じゃけんに唇を噛みしめた。

「何をメソメソ泣くのだ！ ものの分らぬにも程がある」

「わ、わからないのは、あなたのほうじゃございませんか」

「やかましい、ここをどこだと思うのだ、男の役目先へまで来て吠え面をかく奴があるか」

「どこであろうと、私は言いたいことを申します。エエ、弱くしていれば、私なんか、今にあなたのために殺されてしまうかもしれない」

「ウム！ どうしようと、この啓之助の一存だ」

「私だって、なにもこの国へ、島流しにされた科人ではなし、身を売ってきた女でもございせんからね」

お米も負けずに言い返した。

そして、止めどもなく、流れる涙を流れるままに任して、いかにも憎そうに、啓之助を睨みつけている。

その眼が、以前から怨みつらみの数をならべて、男にものをいうような時、啓之助の気持も妙に荒^{すさ}んできて、食いちがっている二人の心と心とが、行く所まで、いがみあわなければ止^やまないのが常であつた。

今も、かれはお米の眼色から、深い反抗が自分に燃えてくるのを感じて、

「身売ってきた女ではない？ フーン、だから、どうしろというのだ」と青ざめて、殊さらに冷たくいった。いう下からお米もまた、

「帰して下さいというんです！」と肩に波を打った。

「どこへ？」

「大阪の家へ」

「虫のいいことを——だれが！」

「か、かえして、くれないとおっしゃるんですか」

「知れたこツた」

「よ、ようございます——、あなたが暇ひまをくれないなら、私は私の勝手に大阪へ行きま
すから。立慶河岸のお母つかさんが、危篤だという早打はやうちがきているのに、帰らずにはおられ
ませんからね……」

「嘘をいえ、そんな、見え透すいた偽りをいつても、この啓之助が手放すものか」

「嘘ではございません、宅助に聞いてごらんさいまし、たしかに、家から手紙が来てい
るのですから」

「くだい！ 何といおうが、わしが大阪へ行くときには連れても行くが、そち一人でまい
ることはならぬ」

「そ、そんなことをいわないで……」お米は我がを折って、啓之助の膝へ泣きくずれながら、
「——すぐに帰ってきますから、どうぞ、二十日はつかほどお暇ひまを下さいまし、ほんとに、今い
ったような、知らせが来ているのですから」

「いけないッ」と、それでも啓之助が意地強く突ッ放すと、お米はもう嘘や頼みではきき
入れられない口惜しさと捨鉢とで、

「あなたは鬼だ！ 悪魔のようなお人です！」

「才才、おれは鬼だ。お前がわしをそうさせたのじゃ」

「みんなに聞いて貰います、世間の人に何もかも話してやります。お関船の底へ無体に私をほうりこんで、その上にまだ……」

「大きな声をするなッ」

「しますッ。どっちが無理か世間にきいて貰います」

「ばか、ここは剣山の麓だぞ」

「向うの目付屋敷には、竹屋三位様がいらつしやいます。三位様のお耳へ届くように、私はわざと大きな声でいつてやるのです」いきなり立って、窓の障子へ手をかけた女は、もうヒステリックにうわずつていて、放っておいたら、威嚇ばかりでなく、ほんとに、何をしゃべりだすかしないような血相だったので、啓之助もうろたえ気味に、

「ばか！ つまらぬことを口走るな」

と、お米の口を手でふさいで、

「そんなことが御家中へ洩れたら、わしばかりではない、二人の身の破滅ではないか」

「い、いいえ、いいえ！」

啓之助の手へ爪を立てながら、お米は、髪のこわれるのも忘れて、首を振った。

「いつてやります——御家中方の耳へ」

「お米！　あまり男を見くびるなよ。そちは命が惜しくないのかッ」

「殺すのですか、殺すというのですか」

「ウーム、どこまで口の減らぬ女め、啓之助にも、いよいよとなれば、それ相応な覚悟がある」

「殺してください、死んでも私は」

「ええ、どうして貴様は、そうわしを……」

ねじ伏^{たお}して重なりあつた体が、人目もなく挑^{いど}みあつた。肺^{はいぞう}臓の弱いお米は、啓之助に胸を押されて、苦しげに目をふさいだが、啓之助は盲になつたように、その細い喉^{のどくび}首を抱きしめた。お米は、さからいきれない力をふるわせて、ヨヨ……とすすり泣きを洩^{しゅんち}らすばかりだつた。そして、殺すといい、殺してくれと叫んでいた男と女が、気だるい春^{しゅんち}屋^{ゆう}の納屋倉^{なやぐら}に、蒸れ合うばかりな情炎の餓鬼となつて苦悶した。

しばらくしてから……

「ね、今のこと」

お米は、たぼのくずれを、きやしやな指で梳^すきあげながら、男に、うしろを向けていた。

「いいでしょう、ほんとに」

その姿を見るともなしに見やりながら、啓之助は腕枕をかって、グツタリと横に寝ている、酒がさめたような血色をして、

「そんなにも大阪が恋しいか」

「そりやあ……」

髪へ手を当てたまま、そこらに落ちた鬢止めびんどを目で探して――

「生れた土地ですもの。それに、アアして、不意に来てしまったのですもの」

啓之助も、少し哀れもよおげを催して、「じゃ、きつと半月ぐらいで帰ってこいよ」

「行ってもよろしゅうございますか」

「うむ」

「では、これから帰って、すぐに支度や何かをして」

女が、苦もなく急せきだすのを見ると、かれの心はまた、たやすく手離したくないように動きだして、

「だが？ ……まあ待て」と重苦しい口を濁して、そして、何かいおうとしたことまで黙ってしまった。お米は、かれの遲疑をみると、「いいとおっしゃったのでしよう、ね、あ

なた」

あわてて、一生懸命に、啓之助のそばへすりよって、男の体を抱くように、

「じらさないで、後生ごしょうですから」

と、機嫌をとると、

「エイ、娼婦しょうふみたいな真似まねをするな」

啓之助は、かえつて癪かんにふれた声をして、お米を突き放して起き上がりざま、ふところからつかみだした船切手ふなぎっての木札を、女の膝へ叩きつけた。

「行つてこい！　だが、なんだぞ、もし大阪へ行つたきり戻らぬ時には、キツと命を貰いにまいるぞ、いいか、それだけを忘れるなよ」

「まあ、邪推ぶかい」

「それでなくとも、貴様は剣山の隠密みたいに、隙さえあれば逃げたがっているんだ」

「そんなことがあるもんですか、きつと、一日でも早く、阿波へ帰ってまいります」

「宅助を付けてやる、あれを連れてゆけ」

「エエ、その方が、私も気強うございます」

「で、近いうちには、お関船せきふねの便がないから、上方へ荷をだす四国屋のあきない船への

せて貰うがいい。そして、帰りには、月の下旬に阿波へ戻る同じ船で、きっと帰ってこないと承知せぬぞ」

ともすると、啓之助が気を試そうとするふうなので、お米はうれしそうな顔を隠すことに注意していた。

と。二人のいるこの納屋蔵なやぐらのまわりへ、急ぎ足にきた人足が止まって、

「森様——。森様はここにおいでではございませんか」戸をこじあけて入ってくる様子だ。

「あ、誰かきました」

「お米」

啓之助はあわててあたりを見廻して、納屋番の藁わらぶとんが積んであるうしろへ、女を隠した。そして自分から入口の土間へ姿をみせ、

「啓之助はここにいるが、なんじや」

「あ、おいでなさいましたか」

入ってきたのは、剣山の山番たち、ゾロゾロと七、八人、一人が手に一本の矢を持って、漆うるしが干からびたような鏃やじりの血汐を啓之助に見せていった。

「石牢にいる俵一八郎が死んでおります」

「えつ、一八郎が絶命した？」

「はい、何者かに、射殺されたので」

「それを見せい」

引つたくるように取つてみると、まさしく竹屋三位たけやさんみの矢である。この間三位卿は、間者牢のいわれを聞いてその迷信を嘲笑していた。

そして、冗談のように、今でも隱密を殺せば徳島城にたたりがあるかないか、試しに、世阿弥が一八郎かどちらかのひとりねんぐを殺してみたら面白いがといっていた。

また責任のない居候どのが、口に年貢ねんぐのいらぬ戯れ言ざごとをいうな、とその時は、啓之助も笑っていたが、これを見ると、竹屋三位卿、ほんとに、劍山の迷信へ、槇葉まきはの鏃やじりをうちこんでしまった。

「とにかく一八郎の死骸を片づけ、仔細を徳島城へ申しおくことにいたそう。いつもながら放恣ほうしな三位卿、困ったことをしでかしたものだ」

と眉をひそめながら、啓之助は、また鏃やじりの血の痕をみるにつけて、思わず肌を寒くした。かれの脳裡にも、自分では意識しない迷信のおびえがあった。

「――折も折、渭の津のお城に、何ぞ不吉なことがなければいいが……」こう思う不快さに目をつぶった。啓之助ばかりでなく、変を知らせてきた山番たちも、伝説の禁断を破ったことが、何となくそろそろおそろしい様子で、必然、この結果がなくてはならぬように信じている。

強請^{ゆすり}にきた甲比丹の三次を、物蔭から一矢^しに射た時には、三位卿の殺人好みも悪くは思えなかったが、その放恣な矢を石牢の中へまで放ったのは、いくら大事な食客殿としても、少し殿の優遇に狎^なれすぎるきらいがある、と啓之助は、目付役という自分の職責の上から腹を立てた。

それを報告したら、さだめし太守も神経を突ツつかれるに相違ない。けれど下手に隠^{へた}蔽^いしておいて後日に分るような場合には、自分の落度とならざるを得ないから、一刻も早く徳島城へ帰って、ありのままに上申し、向後^{こうご}あの居候殿の放^{ほう}縦^{じゆう}も少し慎しむような方針をとるべく、上^{かみ}にも御意見しなければならぬ――と啓之助は、山番たちの前に息まいて、それぞれの指図を与え、納屋蔵の外へ追いやった。

そして自分は、前の陰湿な部屋へ戻っていった。そこには今し方、お米がとりみだしたすすり泣きや髪の毛の匂いが、愛慾の感情にからみやすく漂^{ただよ}っていたが、かれの頭脳^{あたま}は不意の

事件で忘れたようになっていた。

「お米、わしもにわかに、御城下へ帰る都合になったから、すぐに支度をせい」

「え、これからすぐに」

「ウム、空も少し曇り模様、明日あすとのぼして雨にでもなると困る。疲れたであろうがすぐに立とう」

「いいえ、まだ歩けないほどではございません」

隠れていた藁わらぶとんの蔭から、そういいながら、襟えりをかきあわせて立ったお米は、徳島へではなく、大阪表へ早く帰れる都合になったうれしさを、思わず顔に出している。

酔いと疲れで、だらしなく寝込んでいた仲ちゆうげん間の宅助、にわかに起こされてうろたえながら、またわらじの緒おを結びなおして、裏道から四、五丁出てゆくと、啓之助は菅笠に霰あられの打ぶつき羽織で、先に廻まわって待ちあわせていた。

「もし家中の者に出会ったら、わしの側を離れて、素知らぬ振りをしてゆくがよい。吉野川へ出れば下りの舟、乗ってしまえば別に人目の心配はないわけだが」

匿かくし女を持っているのも、なかなか細心でなければならぬ。啓之助は歩きながら、たまたくる里の百姓にも気を配かって、お米と道をひとつにして行く。

「徳島へつくと、わしは屋敷へも寮へも寄っている暇がない。きつきお前が聞いていた通りの事情で、すぐに登城して殿へ委細の報告をせねばならぬから——。で、お前は、いづれ寮へ帰った上に、何かの支度もあるうから、その間に、宅助をやつて、四国屋の荷船の都合を問い合わせてみい。それから、最前渡した船切手、あれを落さぬようにな、よいか、また大阪へまいつても、御当家のことや要^いらざることを他言^{たごん}してはならぬぞ。宅助、そちにも何かの注意を頼んでおくぞ」

もう二里ほどは歩いたろうと思われる頃である——三人のゆく後ろから、大地に馬蹄をひびかせて、まっしぐらに駒を飛ばしてきた若者がある。

驚いて、両方へ道を開いたとたんに、土を飛ばして、鞭^{むち}をくれ、疾風一陣に駈けぬけた馬上の人——パパパッ——と十数間^{けん}走り越したところで、急に手綱をしばり止めたかと思ふと、

「オオ、啓之助、啓之助！」

ふりかえつて、家来のように呼んだものだ。

「——早くまいれよ、徳島城へ！ 女の足をいたわっていると間にあわんど！ 江戸へ上った天堂一角より、何やら大事な知らせがまいつて、また一会議あらうと申すぞ。身にも

急いで帰城せよと、阿波殿からのお招きじや。早くこい！ 早くこい！ 天下の風雲急ならんとする秋、女ときのひとりぐらゐは捨てて行つてもよいではないか」

そこで、ピシリツとまた一鞭むち、悍馬かんばをあおつた竹屋三位は、菜種なたねの花を蹴ちらして、もうもうと皮肉な砂煙を啓之助に残して行つた。

気がついてみると、午後も早遅いのはあろうが、にわかにも空も地もドンヨリと薄ぐらく、剣山の肩の一部が、まッ黒に見える以外は、いちめんなる雲であつた。その雲の裡うちには、甲賀世阿弥が、今も血汐の筆をとつて、秘帖ひじょうに精をしぼっているだろう。

雲の奥か、地の果てからか、おそろしい響きが人身じんしんに感じてきた。

煙草畑たばこの娘たちは、雑草抜きをやめて姿をかくした。やがて、土佐境とさかいの空には春雷が鳴つていた。

ぎしんあんき
疑心暗鬼

諏訪すわの温泉町ゆまちは、ちょうど井桁いげたに家がならんでいる。どこの宿屋にも公平に内風呂というものはないので、その井いの字なりの町のまんなかにある三棟むねの大湯へ、四方の旅籠はたごのお

客様がみな手拭てぬぐいをブラ下げて蝟集いしゅうしていた。

ここは木曾路をへてくる上方かみがたの客、信濃路しなのじからくる善光寺帰りの旅人、和田峠をこえて江戸の方角から辿りつく旅人などが、一夕せきの垢あかを洗うべく温泉ゆをたのしみに必ずわらじを脱ぐので、中仙道の宿駅のうちでも指折りの繁華をみせていた。

夕方の六刻むつというとき、もう三道の客が織るように入ってくる。温泉町ゆまちの入口は馬や駕かごや運送の人足で埋まっていた。昼間はさしては白くもみえない湯けむりが、宿屋の軒にまでモクモクと這いだして、硫黄いおうの匂いまでがなんとなく生なま新あたしく鼻をうってくる。

赤い前垂をかけた宿引の女が、ぶかつこうな杉下駄をはいて猫じやらしの帯をふりながら、向う側とこつち側で、互いに腕にヨリをかけるのはその時分で、

「かしわ屋でございます、かしわ屋はこちらでございます」

「桔梗屋きぎようは手前どもで、昨年もごひいきになりました」

「ハイ、越後屋でございます」

「お馴染なじみの鍵屋かぎはこちらでございます」

喋ちやうちやう々 とさえずるばかりでなく、信濃そだちの強力で、笹をひツたくる、振分ふりわけを預

かつてしまう、合羽の袖そでにほころびをこしらえる。文句をいえば、晩にわたしが縫ってあ

げます——と上手に見る。またそういうのに宿引女の極伝ごくでんがあるそうで、わざとほころびをきらす女ばかり抱えておく別宿べつやどもあつたりする。

なにしろ、大湯おおゆの横にひっついてゐる湯番小屋で、五刻いつくの拍子木を打ち、導引どういんの笛がヒューと澄む頃までは、このかしまじさがやまないのである。

「ホイ」

「ここだな」

「会田屋あいだやさん、お客様だぜ」

下ノ湯しもゆの角かどにある大きな宿の店先へ、二挺ちようの駕ががおろされた。

「ご苦勞様」

「駕屋さん、こちらへ掛けて一服お吸い」

「ようお着すきなさいました」

「お洗足すすぎ水を」

「いえ、お荷物はこちらへ」

女中や番頭に取り巻かれて、すすぎ盥だらの前へ腰かけたのは、商家の内儀ないぎらしい年増の女と、地味しまな縞しまものを着た手代風てだいの男であつた。

足を拭いていると、帳場格子にいた会田屋の老主人が、ちらと見て、初めて気がついたように筆を耳に挟んで出てきた。

「これはお珍しいことで、四国屋のお内儀様ではございませんか」

「おや」と、つつましい笑い方に黒豆をならべたようなおはぐろの齒を見せて、

「善七さんでしたか、いつもお達者らしくて、ほんに、けっこうでございます」

「はい、おかげさまで、ありがたいことでございます。したがお内儀様、こんどもやはり善光寺へお詣りのお帰りでいらつしやいますか」

「ええ、それが実は、小諸のほうの取引先に、ちと藍草の掛けがたまりましたので、信心やら商用やら」

「おお、それじやたいそうな廻り道で……きようはあの和田峠をお越えなさりましたな。さぞお疲れなことでございますよう」

「疲れもどこかへ消えてしまいました。その和田峠から、とんだ目にあいましてね」

「ま、そこではなにございますから、さ、どうぞこっちへ」

「新吉や」と、手代の方へ目交ぜをして——「お前も早くこっちへ体を隠したがよい。そんな所に坐っていると、また外から見えるじゃないか」

「四国屋様」

「はい」

「なにか外で、怖ろしいことにでもお逢いなされましたか」

「エエ、和田峠から、私たちを、つけ廻してくる侍がありましたね」

「へえ、あなた方を？ ……」

「お宅へ着いて、ホツとひと安心いたしました。まだこのように胸が波を打っておりま
する。誰か、お冷水を一杯下さいませんか」

「怖ろしい侍たちでございました。しかもそれが三人づれで、和田峠の下りから、オーイ
と、私たちを呼びはじめたではございませんか」

四国屋とよばれた商家の内儀は、宿屋の老主人にこう話して、青い眉毛の痕をひそめた。

「ほ、三人づれの侍が？」

「ふりかえってみますと、上から早足に追ってまいります。それは、かなり間がありまし
たゆえ、わたしどもは怖い一心で、麓へつくとすぐに駕へ乗ってまいりましたが、気味の
悪い侍たちは、それから先まで執念ぶかく駆けてきたそうでございます」

「ま、なんという図々しい奴」

「藍草あいくさの掛けを取ってまいりましたので、その金に目をつけられたかと存じます」

「そうかも知れませぬ。ですが、もうご安心なさいまし、ここへ来たとして、決して泊めは致しませぬ」

「もしまた、姿でも見つけると、これから先、上方までの道中が、ほんとに思いやられま
す」

「そういう訳なら、早く、奥の部屋へ隠れておしまいなさいませ。おいよ、四国屋のお内
儀様を……そうだな、どこがよからうか」

主あるじの善七が考えていると、そのまに、四国屋のお久良くらと手代の新吉は、案内もなしに奥
の廊下へバタバタと走りこんでしまった。

妙に思っ、なんの気なしに善七が店先を見ると、今、お久良から話をきいていたばか
りの三人組の侍。

「ここだろう」

「ここらしい……」と、あたりをジロジロねめ廻しながら、遠慮なく店へ寄ってきた。

ひとりくまがいは熊谷笠をかぶり、ひとりそうはつは総髪、そのうしろには、底光りのする眼をもつ

た黒頭巾黒着^{くろぎ}の武士。

これはいうまでもなく、お十夜とほかふたりの者である。和田峠の中腹を下つてきた時、周馬と一角が、先へ遠く急いでゆく男女のうしろ姿をみとめて、あれこそ、お綱と万吉に相違ないとばかり、にわかに意気こんで、足を早めて追いかけたのだ。

すると、追えば追うほど、いよいよ先の男女^{ふたり}が、後もみずに逃げだす様子なので、初めの怪しみは、的確に、それと思いこむようになってしまった。

「駕のついたのはたしかにここだ」と周馬が会田屋^{あいだや}の前で明言すると、お十夜と一角がズツと中をさし覗^{のぞ}きながら、ゆるせよ、と声をかけて、すぐに埃^{ほこり}をハタき笠と振分を投げだしそうにした。

外にいた客引の女が、それと知つて、あわてて洗足水^{すすぎ}だらいをそこへすえると、帳場のわきに立つて眼を丸くしていた主^{あるじ}の善七、びっくりして店先へ飛んでくるなり、

「ばか！」と、女をどなりつけた。

「もうどの部屋もいッぱいで、御案内する座敷もないのに、なんでお断りしないのだ。気のきかないやつめ、ましてやお武家様方へ、しッ、失礼千万な」

叱^こられた女は、いったい、何がどうした叱言^{ここと}なのかわからないが、客商売の断るかけひ

きはままあるので、そのまま、口をつぐんでいる。

「どうも申し訳がございません」

善七は如才なく両手について、

「せつかくでございしますが、上も下も、折悪しくふさがりまして、御用に足りませんような座敷は一つもござりませぬ。まことに申しかねますが、どうぞほか様へひとつお越しのほどを」

三人は黙って顔を見合せたが、こう不自然な断り方をされてみると、一層、ここへ逃げこんだ男女ふたりがてつきりそれと思われるし、善七の方にしてみれば、そう疑ってくる三人組の侍が、ますます道中稼ぎの浪人者とみてとれる。

「そうか、座敷がないとあらば、無理に泊ろうとはいわぬが……」

と天堂一角、傷の片腕を胸に曲げ、熊谷笠のうちから亭主の面おもてを睨みつけた。

「今し方のこと、当家へわらじをぬいだ男女がある筈、それをここへ呼びだして貰いたい」

「おまちがいではございませんか……私どもには、いっそうそんなお客様は」

「隠すな！ たしかに見届けてまいったのだ」

「いえ、決して、隠しなどを」

「では出せ、その者をこれへ出せ！」

「でも、そういうお客様は、ハイ、今し方ならなおのこと、男女ふたりづれのお泊りはございませぬ」と、一角の威嚇いかくを巧みたくにうけて、どこまでも善七が言いぬけていると、側にみえてたお十夜が、ちえツと、齒がゆそうに癩かんを起こして、

「やい、亭主、甘くみてたかをくくつていると、気の毒だが、土足で家探しという荒療治になるぞ、いくら茶代をハズまれたかしらねえが、それとこれと、どっちが算盤そろばん玉だまに合うか、よく考えて返辞をしろ」

これはまるでムキ出しな浪人ろうにん伝法でんぽう。一角ほど肩かた肱ひじは張らないが、その代りに、黙つて刀が先にものをいいそうだ。

大湯の八間燈はちけんや宿屋の軒行燈のきあんどんにちょうど灯の入る刻限なので、退屈な温泉ゆの客と入りこんでくる旅人が、たちまち輪になつて、会田屋の前をふさいでしまった。

「見世物ではないぞ、なんでそこらに立つか！ あっちへ行け、あっちへ行け」

旅川周馬は、お十夜と背なかあわせに向いて、むらがる弥次馬を追っぱらいながら、顎あごのいきびをつぶしている。

そのうちに、湯番がきて、会田屋の肩をもったり、喧嘩と思いちがいして、仲裁に入る侍が出たりして、お十夜のかけあいも、ついに、一場の喜劇となつてしまった。

土地には土地の約束もあるし、ことに、温泉町ゆまちのような場所には、犯すべからざる旅客おきての掟がある。いくら一角の自来也じらいやや、周馬の風采にひと癖ありとみえても、めつたにそれを破らすものではない。

なおこれ以上の騒動を起こすと松本の代官所からやつかいな者が出張でばつてくる懸念もあり、かたがた衆人環視の中なので、ぜひなく三人は、会田屋の前を離れた。

しかし、そこを去つたとはいうものの、もとより素直すなおにこの諏訪すわの温泉ゆの町を出てしまつたわけでは無論ない。七、八歩あるいて、すぐ前の十三屋という家へ入つた。そして、会田屋の二階と向い合っている表二階を明けさせて、ここから前の出口を見届けていようということになった。

さらに、それでも不安な点があるので、宿の者に過分な心づけを与えて、あの時刻に、会田屋へ入つた男女ふたりの客が、裏口からでも立つた時には早速知らせてくれと、念入りに手を廻して、さて、やつと、旅装を解いたのである。

周馬もどてらになり、一角もどてらに着かえたが、お十夜は着流しなので、あえてその

必要もなく、茶をすすっていると、それを残して、二人はいつのまにか外の温泉につかてきた。

「なかなかいい温泉だ、お十夜も一風呂ザツと浴びてこないか」

「おれは後で行くよ、寝しなに」

膳がくる。蜆汁の椀、鯉のあらい、木の芽田楽、それに酒。

信州路へ入って、鯉の料理にお目にかからない日はないぞ——といいながら、周馬が箸をチュツとすすって、うむ、こいつはいい、諏訪湖の味がするぞという。

このあたりで古い歴史のある俚謡、木曾ぶしの絃歌が、赤く曇った湯気の町にサンザめきだす頃になると、

「どうだ、ひとつよぼうか」

と周馬がぬけめのない提案をもちだすと、「なにを？」と一角が通じない反問をする。

「なにをって、すなわち、唄い女をさ」

返辞をしないで一角は、またのび上がって会田屋の門口を見おろしていた。お十夜は何をおかしく感じたか、周馬の顔をみて苦笑をもらし、それを隠すべく杯をさした。

平凡なる一夜をすごして、翌朝、起きるやいな、見張りを頼んでおいた宿の者をよんで、

会田屋の男女が立つたかどうかを問いたですと、まだたしかに落ちついていてという返辞。
 その宿の男は、きのう、三人が会田屋の店に立った少し前に、駕を出て前の家に入った
 男女を見届けているということを知っているのです、お十夜も一角も、すっかりこの男の見
 張りを信頼していた。

けれど、この男の見届けた事実には相違はなく、和田峠から追ってきた自分たちの眼が錯
 覚をおこしているのだとは、今にいたつても気がつかない。

遂にまたそれに惹かれて、一日を暮らしてしまった。そして、一角も周馬も寝しずまっ
 た真夜中である。お十夜はただひとり、緒のゆるい宿屋の下駄を突っかけて、屋根へ大き
 な石が幾つものせてある大湯の浴槽へつかりに出かけた。

どこもかしこも、昼のように明るく燈がつき放しになっているが、疲れたような空気が
 シーンと沈んでいる。孫兵衛は空を仰いで青い星を見た、どこの二階の障子にも影法師が
 ない。

いつもかれのみは、こういう時刻を好んで湯にひたる習慣である。習慣というよりは努
 めているのだらう、とかく人に疑惑されている十夜頭巾を解くのに、ひとりの者が側にあ
 ってもならない。だが、今頃になれば大湯の中にも誰もおりはしまい。

もうもうと白い湯けむりをあげている板囲いの浴槽は、上ノ湯、中ノ湯と二棟に別れて長屋なりにつづいている。孫兵衛は歩みよった頃からまず中ノ湯の戸をぐわらツとあけて、ふと、脱衣場の棚をみると、女の帯と寝衣がおいてあった。

で孫兵衛。それを避けて上ノ湯の方へ歩みだした。板囲いの戸が細目に開いているので、覗いてみると、いッぱいな湯けむりで中はもうとしているが、チョロチョロと温泉が湧きこぼれる音のほか別に人氣もないらしいので、スツと土間口へ足を入れ、腰の助広を取つて棚へおこうとすると、からりと、鞆にふれて鳴つたものがある。

見ると、尺八、いや、それと同じような一節切の竹と天蓋。——これはまずい、あいにくとここにも誰か湯浴みをしているやつがある——と舌打ちをしてフト向うへ眸をこらすと、湯気にまぎらわしい鼠色の衣を着た一人の虚無僧、掛絡を外し、丸ぐけの帯を解き、これから湯壺へ入ろうとしている。

何思つたか、かれは、いきなりそこを飛び出し、宿の二階へ戻ってくるやいな、寢酒に酔つて正体もなく眠っている周馬と一角とを揺すぶり起こして、

「おい、起きろ、すぐに支度をしろ、支度を」

不意に夢を破られて、赤い眼を洩そうにあいた二人は、時ならぬ頃に、お十夜があわただしい態をキョトンとして眺めながら、

「なにを騒いでいるのだ」

と枕に顎を乗せたけれど、容易に立ち上がりそうもない。

「意外なやつに出会ったぞ。まあいいから、とにかく起き上がってくれ」

「起きろというのか」

「ぐずぐずしているまには、またとない機会をのがしてしまうことになる」と孫兵衛は、用捨なく二人の夜具をはねのけた。かくてはいかに横着な周馬でも一角でも、安閑と寝てはいられないので、それと一緒に飛び上がって、

「では、会田屋に泊っているやつが、宿をぬけだして行っただろう」と、当然そうあるべきことと、思い当るところをいったが、孫兵衛はそれでもないとかぶりを振って、枕元の水挿を取り、

「とにかく、こいつをグーと飲んで、よく眼をさまして貰いたい。その上で話すでしょう」「ふム？……」と一角は、やや怪訝な顔をしたが、すすめられるまでもなく、酔ざめのほしかつたところなので、それを取って水挿の口から喉を鳴らして飲み干し、周馬にもす

すめると、周馬は事態の容易ならぬさまにやや寒さをもよおしたらしく、いらない、とばかり身を硬くしてお十夜の面をジツと見つめている。

「ところで、何だ、お十夜」

「周馬」

「ウム」

「一角」

「才オ」

「法月弦之丞のりつきげんのじょうがツイ鼻の先に来ているぞ」

「えっ……弦之丞が」

この一句は一斗との酔よぎめの水をのむより二人の目を冴えさせてしまった。

「——今おれが何の気もなく上ノ湯へ行つたところが、そこに一人の虚無僧がいる。湯気にさえぎられて先ではこっちの姿を見なかったらしいが、おれの眼にはしかと分つた、まぢがいなく法月弦之丞、ちようど温泉ゆにつかつている頃だから、そこを襲つてやろうと思うがどうだ」

「よしッ。いい所を見つけてきた」

一角が鎧こしりを突いて立つと、旅川周馬、

「だが、待ちたまえ」と、沈着を装つて、

「江戸表で探つた所から推すと、その弦之丞は、もうとくに、垂井たるいの国分寺に着いて、道者船の出る日を待ちあわせている筈だ。それが、いまだにこの辺にいるというのは腑ふに落ちないように思うが……」

「腑に落ちても落ちないでも、この孫兵衛が見届けてきた事実をどうする」

「しかし、疑心暗鬼ということもあるから」

「疑心暗鬼？」

「常に弦之丞のことを念頭にえがいているため、その錯覚さつかくで、縁なき虚無僧までが、それらしく見える場合もない限りではない」

「ちえツ、また周馬が小理窟こりくつをならべだした。時刻を移して、かれに先手を打たれては大変だ。お十夜！　こんにやく問答をしている場合ではあるまい、すぐに行こう！」

自来也じらいや鞆たばの下緒さげおをしごいて、一角が性急にそこを出たので、孫兵衛もまた、周馬をすてて梯子はしこを下り、周馬もまた、いやおうなくついて、宿の外へ飛び出した。

深夜、人なき浴槽に身をひたして、こんこんと噴きだす温泉のせせらぎに耳心を洗いな
がら、快い疲れをおぼえていた法月弦之丞は、やがて湯から上がって衣類をつけなおした。
常木鴻山と松平左京之介のほかは、誰も知らぬまに、代々木荘を出立したかれで
ある。日程にすれば、もうとくに美濃路に入っている筈だが、道者船にのりあわせるには、
向うでだいぶ待つことになるので、わざと道を迂回して、屋代上田などに旧知の剣友をた
ずね、さながら的なき旅をするもののように、今日も夜にかけて峠を越え、この温泉町に
辿りついたのを幸いに、自然の報謝をうけて、旅の垢を洗っていたのだ。

さて、久しぶりに爽快な気を味わったが、時刻はいたって都合が悪い、もう夜半もす
ぎてやがて五更になる頃おい、宿をとる間はなし、といってこれから塩尻の高原へかかる
のも早過ぎる気がするし？ ……。

ままよ、かりそめにせよ、普化僧の法衣を借りてある以上は、樹下石上も否むべきでは
ない。道に任せて歩き、疲れた所を宿として草にも伏そう。と笛袋をさし、天蓋をかぶり
かけていると、湯小屋の戸がガタンと動いた。

が、風でも吹き去ったのか、そのまま誰も入ってくる様子はないので、かれは片足立ち
になって、わらじの緒を結んでいた。と、またかすかな音が外でする、人の蹠音低いさ

さやき……、それは耳に触れる程なものでないにしても、かれの心耳には明らかな空氣の動揺を感じられた。

試みに戸へ手をかけて、一、二寸、ズズ……と引いてみると、外からひっそりした夜氣がスーと流れこんでくるだけで、格別なこともないが、なにか、一脈の殺氣が弦之丞の面を打ってくるように思われる。もつとも、かれには、最前ここをあげた男が、妙にそくさと戻って行つた不審もあつたところだが……。

「はてな、これはおかしい」と氣づいたので、かれは湯小屋の羽目へ背中を貼りつけたまま、サツと不意に引き開くと、それを待ちかまえていたらしい者が、ふいに躍りこんでくるなり、白刃をふつて湯けむりの空を斬つた。

さてはと、足をあげて弦之丞、その男の腰とおぼしい所を蹴つて放す。

ドボンと湯槽ゆふねの中に湯の飛沫しぶきが立った。さだめし首から先に突ツ込んだのであろう。ぷツ……と濡れ鼠ねずみになつて喚わめいたのは旅川周馬。

「一角ツ、早く助劍じよけんを！」

いうまに弦之丞は、戸口から外へ足を踏みだした。とたんである。右に添つて隠れていた一角の大刀、左に息をのんでいたお十夜の助広すけひろが、かれの姿を待ちかまえていた。

足をすくった孫兵衛の刀は、風を流して湯小屋の柱へズンと食いこみ、一角の烈刀は一ひ節切とよぎりの竹にはね返されて、柄手つかでにきびしいしびれを感じたばかり。

人を斬らんとする程の力で、柱へ斬りこんだそばる助広は、とつき、たやすくは抜きとれないので、気をいらった孫兵衛は刀をそこに残したまま、ダッ——と追つて弦之丞の後ろに組みつき、ここぞという一念を拇指おやゆびにこめて、相手の喉のどにくいこませたまま、

「一角、わき腹を突け！」と呶鳴った。けれど、寄り進んできた天堂の前には、そう呶鳴った孫兵衛そのものの体が、もんどり打って躍ってきたので、ふりかぶった大刀を無碍むげにふって落せば、弦之丞を打つ前に、お十夜を両断にしまったかもしれない。

この一瞬に三人は、前後も場所がらも時刻も忘れて、すさまじい声と気合を発したのであろう。たちまち、四方に密集している温泉宿の二階や店先には、何ごとかと驚いたふうな人影が立って、またぞろ静かな温泉ゆの町の平和はおびやかされてしまった。

もちの木坂きさか

木曾福島の関所の高地から目の下の宿しゆくを見おろすと、屋根へ石をのせた家ばかりが櫛比しつぴ

していて、ちようど豆板という菓子でも干してあるような奇観。

その関所の西口から急落している石段を、今、ひとりの儒者ふうの男、肩から紐で合財袋と小瓢をさげ、その小瓢のごとく瓢々乎として降りてくる。

宿へ入ると、瓢先生、左右に軒をつらねている名物屋を、しきりに右顧し左眊して、干し岩魚の味をたずね、骨接薬の匂いをかぎ、檜細工や干瓢屋の軒さきにまで立つたが、ベツになんにも買いはしない。

あまつさえお六櫛を造る店の前では、がらにもなく挿櫛や鬢櫛を手にとって、仔細にその細工のあとを眺め、ふところから日誌をだして二、三種の形を写した上、値だんも聞かずに、またその先へぶらぶら歩いて行つてしまふ。

すこし變つてゐる男だ。

いたつて悠長な旅には違ひない。後からくる旅人がいくら先へ追い越して行こうと、駕屋が声をかけようと、一向氣にとめる風もないが、何かに見とれている場合、不意に馬の長い顔が肩へ食いつきそうにでもなる時は、さすがに少し驚いて蛙のように横へ飛ぶ。

すると、この宿の出はずれには、あだかも、この変り者を待ち設けていたように風変りな店が控えていた。

木曾街道で有名な、ももんじ店だなである。隣から隣へつづいて半丁ばかりの両側は、みな、大熊、熊の胆い、貂てんの皮、などという看板をかけた店ばかり。狐、猪しし、小熊こぐまの生けるを檻おりに飼つて往来の目をひく店もあり、美々びびしい奇鳥の啼なき声に人足ひとあしを呼ぼうとする家もある。そして、獣皮じゅうひ、獣蠟じゅうろう、膏藥こうやく、角細工つのさいく、馬具革ばぐがわ、袋ものなど、あらゆる獣産じゅうさんぶ物ものを売っている。

瓢ふくべ先生は、果たしてこの奇なる景觀にうたれたとみえて、やがて百獣店ももんじだなの一軒へ、ずツと寄つて行つたかと思うと、その店先へ腰をおろした。

「いらつしやいまし、熊の胆いをさしあげますか」

亭主が早くも貝殻の詰まった箱を持ちかけると、かれは侮辱されたように、その熊の胆いを舐なめたと同じ顔をして、

「そんな物はいらん。わしは医者だからな」

と、店の中を見廻した。

「ああ、なるほど」

亭主は自分の魯鈍ろどんに感心した。

細くつめて結んだ鬚まげなり風采なりが、医者といわれればどう眺めても医者である。

「黒貂くろてんのばんがあるかい」

「？……ばん　て何でございましょうか」

「てのひらだよ、黒い貂てんの」

「ああ、なるほど」とまたうなずいたが、

「どうもおあいにく様で。それにいくら木曾の山中でも黒毛の貂てんなどはめったに捕れませ
ん」

「じゃ、こんど出た時に送って貰おう」

「おうけあいではありませんが、お所だけ伺っておいてみましょう」

「ム、わしは、大阪の九条村、平賀源内というものだよ」

「あ、平賀先生で、お名まえは伺っておりました。どちらへお越しでございますか」

「御岳おんたけへ薬草採りにまいったが、どうも、ほしいものがあまりなくてな……。だがまた、
意外な儲け物もうもいたしたよ。これ」と合財袋の口をのぞかせて、採集してきた草根木皮そうこんもくひ
を一掴つかみつかんで見せていたが、その時、ふと店先を過ぎてゆく旅人の姿に目を追って、

「ではまた、なんぞ要る品もんがあつた時には、手紙を出して注文するから、よろしく頼むよ」
あわてて百獸店ももんじだなを出た源内は、七、八間ほど走りだすと、先へゆく二人づれの後ろへ、

「おい、万吉。そこへゆくのは、天満の万吉ではないか」と呼んで煽ぐように手をふった。

声に気がついて、足を止めた先の者は、中仙道の順路を辿つてこの木曾街道のなかばにある目明しの万吉とお綱であつた。

通りすがつた姿を見かけて、百獸店ももんじだなから追つてきた源内は、とんだよい道づれを見つけた気で、緩々かんかんたる歩調とのどかなあるきばなしに、木曾風俗の漫評まんびようや、御岳山おんたけさんの裏谷で採つた薬草の効能や、そうかと思うと、近頃、大阪に見えない鴻山こうざんはどうしたろうとか、俵一八郎の伝書鳩はどうだとか、木曾のお六ぐし櫛に朱漆しゅううるしをかけてミネに銀の金具をかぶせ、こいつをひとつ源内めい櫛と銘をうって花柳界に流行はやらせてみたら面白からうとか、それからそれへ、とめどもなくしゃべりつづける。

おかげでお綱と万吉は、数里の道のりをいつのまにか歩いたが、御岳の薬草やお六たさん櫛のことなどは、二人の旅に他山の石ほどの値打もない。だが、どうせ歩く道はひとつなので、その晩は須原の駅に泊りとまをとつて、同じ部屋にくつろぐと、晩酌ばんしゃくの話にまた源内流の旅行要心がでる。

まず駅舎へついたら、土地の東西南北、宿やどの雪隠せっちんや裏表を第一に睨んでおくこと。刀かたな

脇差はこじりを背中で挟むくらいに床の下へさしこんで寝ること。隣座敷でする碁将棋の音や浄瑠璃などには決して口をつりこまれぬこと。またこういう物を持って歩くと便利だよと、智慧の環のような金具を出して五ツの鉤に解き放し、それを長押へ一つずつ懸けて、笠、衣類、合財袋、煙草入れ、旅の身上をのこらずこれに吊つてみせる。

駕に酔つたのは船暈より気もちが悪い。酔い癖のある者は駕の戸をあけて乗るがいい。ムカムカ頭痛がしてきた時には、熱湯に生姜の絞り汁を入れて呑む。ことに女は鳩尾をシツカリと締めて乗ることだ、とこれはお綱のほうへ向いていった。

船もなかなか難儀なものだ。ひどく酔う者は血まで吐く。硫黄か懷中付木をふところにして乗ると船に酔わないというが、ひどく船酔いした時には、半夏陳皮茯苓の三味を合せて吞ませるさ、だが、そんな物のない場合が多いから、しかる時には、童子の便をのますとたちまち効果がある。きたないというなかれ、血を吐くよりはましではないか、もし童子便なき時は、大人の尿を吞ますべし——と鹿つめらしく講義をしたが、これは、阿波へ行こうという考えの万吉とお綱に、参考とまではならなくとも、ちよつと耳をひかれた話。

なお、田螺を妙りつけて旅先で用うれば水あたりのうれしいがない。笠の下へ桃の葉をし

いてかぶれば日射病にかからない。足の土踏まずが熱して腫れ痛む時にはみみずを泥のま
ま摺りつぶして塗ること秘方の一つ。苦参くしんという草を床の下へ敷いて寝るか、枳からたちの葉を抱
いて寝ると蚤のみよけになるということにまで源内談義が及びかけた時——不意に、今までヒ
ツソリしていた隣り座敷で、

「だ、だッてお前、どの顔さげて、阿波へ帰れるものじゃない……」

声をたかぶらせていう者がある。

シク、シクと嗚咽おえつする様子が女であつた、連れとみえて慰めている。若い男で、その婦
人の召使であるらしい。

「ま、お内儀様かみさま、そう取りつめて、お考えなさるからいけません。阿波へお帰りなさらぬ
の、死んでしまうなどと、そんなにまで……」

「お前は奉公人だから、そうまでは思うまいが、私にしてみれば、面目なくて、このまま
旦那様へは顔が合されません」

「いえ、私もお内儀様かみさまについてきながら、こういう大事をひき起こしたのですから、その
罪は同じでござります。けれど、お金のことでですから、死んでお詫びをしたところで、そ
れが戻るという訳じやなし」

「でもお前、こんどの掛けは少ないけれど、藍年貢の足しにするお金で、私の戻りを待っている場合じゃないか、それをお前……それをあんな者にゆすり盗られて」

阿波——という言葉がでたのでお綱はそのほうへ耳を澄ました。万吉もどうやら事情があるらしいことと、思わず膝を起こしかける。

けれど源内は、さつきも説いた旅行要心の心得通りに、それを抑え自分の声をひそめてしまった。

あらかじめ察しがついたので、源内と万吉は相談の上、境の襖をあけて隣り座敷へ入って行った。

途方にくれた様子で、そこにいた内儀と手代風の男は、先頃、和田峠でも人違いをされて、諏訪の会田屋へ逃げこんだ四国屋のお久良と手代の新吉であつた。

事情をきいてみるとこの二人は、あの時の難儀をどうにか遁れたと思うと、こんどは真正銘のゴマの蠅に目ぼしをつけられて、四日四晩もつきまとわれたあげく、とうとうこの宿のツ手前にある人なき峠で、腰帯にくるんだままの掛けの大金をゴマの蠅に強奪されてしまった。それもただの金ならいいが、藍と煙草の年貢金として、蜂須賀様へ納めな

ければならない急場に持つて帰る途中なので、国元で、首を長くして待つている主人へ、
どうにも顔向けがならないので……と、思わず取り乱した理由を話したり、合宿の方の
旅情まで不愉快にしてすまぬという詫びをのべる。

これが癩の病とか霍乱とかいいう話なら、源内にも応急策はいろいろあるが、少なから
ぬ大金ではあるし、相手がよほど腕のすごいゴマの蠅ときいては、どうも匙加減の及ぶ所
ではない。これはよろしく職掌からの目明しの万吉がいい相談相手であろうと、自分は精
神的に慰めだけをいうに止めて、先へ臥床へ入ってしまった。

翌朝は源内、かねて名古屋へ廻る予定なので、一同に別れをつげ、先へ宿を立つて行つ
たが、四国屋の者と万吉とお綱とは、午近くまで宿に残つてその二階から前の街道を見
張つていた。

するとやがて、皿のような眼をして、通る旅人を見ていた手代の新吉が、

「あいつだ、もし、あいつです、あいつです」と、障子の蔭から指さして万吉とお綱に教
えた。

「あ、じゃ向う側に添つてゆく、あの青髯のこい大男ですね」

「そうです、赤銅作りの脇差をさしている。あ、こつちを睨みやがった、気がついて

いるのかしら？」

「じゃ、万吉さん、すぐ戻ってくるから、支度をして、宿屋の門まで出ていておくれ」と、
どういう相談ができているのか、お綱はひとりで梯子はしごを下りて行つたかと思うと、もう門
を出て、ゴマの蠅の後になり先になりして、五、六町ほど歩いて行つた。

残つたほうの万吉は、宿の勘定や旅支度など、すっかりすまして駕を頼んだ。けれど自
分は乗らずにお久良と新吉だけをその中へ隠して、しばらく帳場で四方山よもやまの話をしている。
と——そこで煙草を五、六服吸つたかと思うと、お綱が、すこし微笑しながら歸つてき
た。そして、結び丸めた腰帶を、

「この品でしよう？」

お久良の駕の中へ落してやつた。ザクリという金の音がした。あつ——とびっくりして、
うれしまぎれに駕から飛びだそうとするのを、万吉が抑えるようにして、

「さ、急いで、今のうちに道をはかどつておしまいなせえ。なに、礼なんかや及ばねえ、
御縁があつたらまた会いましょう」

無理に別れて二人の駕を先に立たせ、お綱と自分とは後からブラブラ歩きだした。

そして中川原の立場たてばまでくると、さっきのゴマの蠅が、道しるべの石へ自分の笠をかぶ

せ、あたりの草の上へ荷物や帯を解きちらして、何か紛失物でもしたように、蚤取り眼でバタバタと着物をはたいては考えている姿が見かけられた。

万吉は思わずプツと吹き出して、口を抑えて横向きに通りすぎた。お綱も横目で見たことは見て行つたが、なんの表情も現わさなかった。人を助けるためにしても、よしまたそれがどういう理由でも、掏すられた者のうろたえざまをみるのは、かれの懺悔心ざんげしんが人知れぬ痛みを感じる。

美濃へ入って垂井たるいの国分寺へもやがて近くなつた。日いち日とはかどる旅の春も深くなつてゆく。

国分寺につけば、そこで法月弦之丞に会えようと思うことを張合いにして、お綱と万吉は、その日、夕照ゆうでりをみながら少し無理な道みちのりをかけ、もちの木坂の登りにかかった。「男でさえも足の筋が針金のように突つ張つてきたくらいだから、お綱さん、お前はさぞくたびれたことだろう」

坂の中途に立ち止まって、汗ばむ胸へ手拭を入れた。そこからはるかに見渡すと、漠ばくとした雲の海に加賀の白山はくさんが群巒ぐんらんをぬいて望まれる。

「いいえ、阿波へ越えて 劍山^{つるぎさん}まで行き着こうというのですもの、これくらいな所でくたびれてしまつてどうなるものじゃありませんよ」

「そうよな、まだほんとうの難所はこれから先だ、血の池があるか針の山が待っているか、どっちにしても命がけの……」そういうながら、まだどれほどの登りだろうか、もちの木坂の勾配^{こうばい}を見上げると、その中途に、名古屋へ出る裏街道の辻があつて、目印の七本松がそびえている。

深山^{みやまざさ}山笹に夕風がそよいで、ひと足ごとに落日の紅耀^{こうよう}がうすれてゆく。ぶらぶら上つてその辻まできてみると、椿と藪^{やぶ}に埋まつて西行^{さいぎよう}法師の歌碑^{うたふみ}があり、それと並んで低い竹垣根を結い廻した高札場^{こうさつば}がある。みると、宿役^{しゆくやく}の布告^{ふこく}や、何者かの人相書や、雑多なものがバタバタと貼りつけてあるが、目につくのはその側^{わき}に、別に立っている生新しい一本の立札。

なにげなく立ち寄つた万吉、読み下してみてもサツと色を変えた。それは二人がこれから指して行こうとする垂井^{たるい}の国分寺から出た寺触^{てらふれ}で、春の道者船停止^{どうじやふねていし}の沙汰が公示してある。

例年当寺ニテ執シユギヨウ行アワノ阿波丈六寺代印可ノ儀併ビニ遍路ヘンロニ人便乗ノ扱イ等俄ニ阿州ニワカアシユウ
家ヨリ御差止メ有ケ之オサシト候コレアリソウロウヲ以テ中止イタシ候尚秋船ノ遍路ハ其折再告申スモツ
ベキ事。コト

「あ！……こ、こりやいけねえ」

高札の真偽を疑い、おのれの眼を疑うように、万吉はくり返しくり返しそれを読みつづけたが、

「ウーム、こういう沙汰が阿波から出たとすると、いつのまにか蜂須賀家では、もう用意を固めているものとみえる」

「じゃ、この春は、遍路の者の船まで止めてしまったのかしら」

「そういうふうに書いてあるが」

「とすると……弦之丞様は？」

「さあ、どうしたか、この模様変りとすれば、国分寺に足をとめている筈はありますまい」
嘆息ためいきといっしよに腕を組んで触札ふれふだを睨みつけていたが、もう意地もなく気をくじいてしまったように、

「まずかった！」と臍はぞをかねて悔むのだった。

「俺としたことが、思えばとんだ手ぬかりをやっていた。阿波へ入る目標めあてにばかり気をとられていて、こつちの内幕を探られていることを、少しも頭においていなかったのが大失策——、こりやあ天堂一角が、江戸から本国へいちいち早打をうって知らしていたので、こつちの先手を越して道者船を取止めたのに違えねえ。ウウム。これじゃまた阿波へ足づみをする道順が、百倍も千倍も大困難になつてきたわえ」

腸はらわたをしぼるような万吉の呻うめきをきいて、お綱も落胆のあまりそこへ坐つてしまいたくなつた。進んでいいか退いていいか、その利害を思慮してみる勇氣さえない。

垂井たるいまで行けば、弦之丞にも会えるだろうし、国分寺の印可いんかをうけて、目的地への渡海もたやすくてできるものと、互に励ましあつてきただけに、二人は希望の目前を絶壁ふせきに塞ふさがれて、茫ぼうとした当惑に立ちつくしてしまった。

すると、坂の中腹、少し平地ひらちになつた草原と空茶店あきぢやみせから、ひとりの武士、いたちのよう顔を出した。

こなたの高札場に立っている、お綱と万吉のうしろ姿を眺めて、首を引っこめたかと思ふと、こんどはその中から四、五人の侍が飛びだして、青い夕闇をすかしているような眼まな

ざし。

指さしながら、何かひそひそとささやきあっていたかと思うと、やがて中のひとりが、二本の指を唇へ当てた。

と——不意に静かに、夕風をうごかして、笹鳴りの音か、水の響きかとばかり、あたりへ鳴ってひろがったのは呼子の笛——。

赤い芽をもった櫨の林に、ありやなしやの宵月がほのかだ。

あやしげな呼子の音に、万吉はぎよツとしてお綱に目くばせした。そして高札の前を離れるやいな、のめるようにもちの木坂を駆け上がった。

とたんに崖の両側からバラバラと飛び下りて来た野袴の武士、前をふさいで十人あまり、いずれも嚴重な草鞋がけ、柄頭をそろえて、

「待てッ」

坂の上から押し加かつて、二人を前の場所まで突き戻してきた。

とみれば、中腹の平地にも、三々伍々の人影が草や石に腰を下ろして、その光景を眺めている。都会の武士らしからぬ言語風俗、まぎれもなくこの者たちは、阿波の国から急行

してきたか、あるいは命をうけて安治川の阿州屋敷から出張でばったものか、いずれにせよ蜂須賀の原土はらしなるには相違ない。

「おい！ こつちへ——」

ヌツと立つてさしまねいたのは、最前呼子を吹いた原土、坂の上から押し戻してきた者たちへこういつて、一同草原のまん中に待ちかまえていると、お綱は利腕ききうでを取られ、万吉は万吉でその襟えりがみをつかまれたまま、否いやおう応なくそこへ取り囲まれてきた。

「貴様だろう！ 江戸表から阿波へまぎれ込もうとしてきた目明しの万吉はツ。ウヌ、そこにいるのこそ見返りお綱という女に違いない。望みにまかせて剣山へ連れて行つてやる、わざわざ迎えにきてやつたのだ、神妙にしろよ」

こういう渡すと左右にいた原土が、バリリツと二人の前へ縄を解いた。万吉は飛びすさつてお綱の身をかばったが、わざとおのく様子をみせて、

「な、何をなさいますんで——ちつともわけが分りません、私どもは商用がてら御岳詣みたけまいりをしてきた帰りの者で、お言葉のような者ではございません。お人違いじゃございませんか」

「その白しらをきる面つらが、なんで今向うの高札の前にあんな様子をして立ちすくんでいたか。

貴様たちをはじめ法^{のりづき}月弦之丞が、この木曾街道へかかることを承知して、罌^{わな}を掛けて待つていたのだ。その逃げ口上は通用せぬ」

「どうおつしやいまして、そんな者でないことにはしかたがございません、へい、私は今も申し上げた通りの旅^{たび}商人^{あきんど}、これは妹の……」あくまでも言いのがれてみようと必死の弁をふるつていると、向うの空茶店の蔭から、頭から棲^{つまさき}先まで真つ黒に着流したひとりの浪人者、ふところ手をしてそれへ出てきながら、

「よせよ、万吉」

と、せせら笑いをうかべて側に立った。

ひよいと見ると、青白い夕月をうけて頭巾の顔——意外やお十夜孫兵衛だ。

「あつ」

と万吉、もう言いのがれの及ばぬはめ、手を振りきって立とうとすると、原士の者と一緒にうしろに立つていた旅川周馬が、

「どこへ行く」

たぶさをつかんで後ろへ仆した。

それを眺めながら、孫兵衛、手も出さずに苦^{にが}笑^{わら}いをかすめさせて、

「よせよ、万吉、そのジタバタが野暮というものだ。てめえも天満^{てんま}の万吉とかいつて、二十五万石の大国へ十手を振りあげた男じゃねえか。その上望みどおりに剣山で、生涯終らしてやるという迎えの御人数へ、手対^{てむか}いをしては罰^{しじ}があたるぞ」——孫兵衛の言葉が続いているうちであつた。もちの木坂の裏道から、樹葉^{じゅよう}を分けて駈け登つてきた編笠^{あみがさ}の男。息がきれたか、途中の岩石に立ち、ホツと麓^{ふもと}のほうへ眼をつけていたが、やがてまた、栗鼠^{りす}のごとき素早さで、岩や根笹をつかみながら、一同のいる平地の一端へその姿を躍り立たせた。

何か？——という気色^{けしき}で、皆の眼がハツとそれへ惹^ひきよせられていると、編笠の男はさらにそこでも下のほうへ向つて、耳へ手を当てていたが、

「方々^{かたがた}、静かにしろ！」と手を振つた。

そして一足跳^{そくし}びに疾走してきながら、編笠をそこへ叩きつけ、意気軒昂^{けんこう}な眉をあげて、
「来たぞ！　いよいよここへ」

と、語尾を強めて言つたのは、すなわち天堂一角だ。

来たとは何者？

かねて期^ごしていることではあるらしいが、黒々とむらがり寄つていた人数が、思わず息

を内へひそめた瞬間に、ちようどもちの木坂の下あたりから唳りようりよう々々と夜を澄ましてくる一節切ひとよぎりの音ねのあることが分った。

「ム！　とうとうきたな」

麓のほうをのぞみながら、お十夜と一角が、口のうちに強くうなずくと、氣早に、下緒さげおを解いて、袖を引っからげた原土の面々も、

「才ひとよぎり才、あの一節切か」

と、険けわしい目合図を投げ交かわしながら、あたりの空氣に氷を張らすばかり、シーンとした緊張味をみなぎらせた。

その間にも、次第に近づいてくる竹の音ねは、一味冷徹な鬼氣を流してきて、そこに、鏑つばぶるいをひそめる者、柄糸つかいとへ唇をつける者などの血汐をいよいよ惣毛そうけだ立たせ、いよいよ猛たけくジリジリと沸わき騒がせる。

周馬に襟がみをつかまれた上に、二人の原土に両腕をねじ上げられていた万吉は、もう今がすべての最期かと思つた。天堂一角と本国との間に、かくも巧妙な連絡がついていては所詮しよせん、劍山はおろか、徳島の城下はおろか、鳴門なるとがた渦の磯を見ることさえ不可能なわ

け。

もとより、こうと知っていたなら、やすやすと原土どもの囲みに陥おちるのではなかった——とこみあげる無念に体をふるわせたものの、それもいわゆる噬ぜい臍せいの悔くいなるもので、かれはたちまち、お綱も自分と同じような縄目にかかるのを見ながら、数人の原土に蹴蹴仆仆され、周馬だかお十夜だかに後うしろ手でに締めあげられたまま、向うの松の大木へ引きずり寄せられ胴どうし縛ばりにくくり付けられてしまった。

「それ、ぐずぐずしている間には！」と一方が急せき立つと、

「向う側へも七、八人廻れ」

「よしッ！」といって珍らしく旅川周馬が疾駆するのを、天堂一角が、それへ続く原土たちへ、

「静かに——」と注意して、さらにお十夜の姿をふりかえった。

「孫兵衛、ぜひとも今夜はぬかつてくれるな」

「ウム、大丈夫だろう？」と気をもたせて——

「これだけの助太刀に、俺たち三人が足場を撰よつて待ちかまえているんだ。諏訪すわじゃあこつちで斬りかけるとたんに、宿屋の奴や湯番の者が拍ひょう子しぎ木なんぞ叩き廻まわつて、弥次馬を

呼んでしまったから取り逃がしてしまつたが、人の絶えたもちの木坂、あらて新手をかえてこれだけの者が一太刀たちづつかすツても、たいがい息のねは止まつてしまふだろうと思う」

「ただ髀肉ひにくの嘆たんにたえないのは、この場合にきて拙者の左腕うでだ」

「まだ思うように伸びないかな？」

「繃帶ほうたいは取つたが、柄つかを自由に扱うことはむずかしい。戸田流の一本使いというような型はとるが、いざとなるとどこか氣力の入らぬものでな」

「ま、おれが先手せんてに斬つて仆すから、しばらく形勢を眺めていてくれ」

と、孫兵衛にも、今夜は十二分な確信があるもののごとく、他の者とはやや離れて、七本松のうしろヘジツと体をかがませていた。

一瞬のまに、そこは墓場ともない寂寞せきぼくの地域に歸つていた。三々伍々に躍つていたあれだけの人数も、ひとり残らず姿を消してしまい、ガサと隠れ場所をそよがす者もない。そして、薄曇りした宵月の明りで、向うの草原にもがいているお綱と万吉だけが、視界の中に動いているものの影である。

その時、気がついてみると、いつのまにか、麓ふもとのほうからくる一節切ひとよぎりの音が途切れていた。と思うと——こんどは不意に、前よりは数倍近い所に、呂々りよりよとした音が起こって、

もうその人はやがて坂の中段を横に切つて行くけいりゆう溪流の丸木橋までかかつてきたかと思われる。

「あ！……あれは山千禽やまちどり！ 山千禽……の曲」

松の根方ねかたにもがいていたお綱は、転々としながらこう叫んだ。叫んだけれど声は出ない。さいぜんお十夜のために、扱帯しつきを解かれて猿ぐつわをかけられていた。

「ちイツ……」無駄と知りながら、お綱はもがかずにはいられなかった。叫ばずにはいられなかった。

「弦之丞様ア！」

必死に喉のどをからしているつもりでも、天地は森しんとして笛の音以外の何ものも伝えない。ただ、お綱の体が根笹の中にひとりでのた打つばかりである。

冷々ひえびえと樹海の空をめぐっている山嵐さんらんの声と一節切ひとよぎりの諧音かいおんは、はからずも神往しんおうな調和を作つて、ほとんど、自然心と人霊とを、ピッタリ結びつけてしまったかのごとく澄みきつていた。

木々に精せいがあるなら、花に化身けしんがあるなら、あなおもしろの交響けいけいよ！ とこの宵月に舞

踊するであらう。

嘈々そうそうとしてやまず、呂々りよりよとして尽きるところを知らぬ一節切ひとよぎりの吹き人ても、今は現うつつであるだろうか。吹いては一步、流しては一步、夜旅の興趣と、おのれの芸味に酔いつつ来るのだろうか。

いや、一片の風流子の心事と、法月弦之丞の心に波うつものとは、大なる隔へだてがある筈だ。したがって、同じ竹枝ちくしの奏すびにしても、その訴えるところは、巷ちまたや僧院の普化ふけたちとは必然なちがいをもち。

かれはおそらく、この木曾の夜の道を踏んで、あの禪定寺ぜんじやうじ峠とうげの頂いただきに、骨を埋めている唐草銀五郎のおもかげを、目にうかべずにはいられない。

血みどろな合掌と、銀五郎が最期の声を新たに思いうかべる時——またかかる夜かれの菩提心ぼだいしんは、知らず知らずにも一節切ひとよぎりの一曲をその霊に手たむけさせる。

なおその呂韻りいんに異常な熱を加えてくると、かれの胸底にひそんでいる剣侠的な情感は、笛あなの孔を破るばかりな覇氣をおびてほとばしる。それは悲壮な行進の譜ふであり、かれの余裕うつつと鬱勃うつぱつの勇を示すものだ、易水えきすいをわたる俠士きやうしの歌だ。

そうした山千禽やまちどりの曲の叫びは、かれの目指す鳴門の海にもひびき剣山の世阿弥が夢に

も通うであろう。

その、法月弦之丞の姿は、今、もちの木坂三ツ目の曲り勾配、空谷の栈橋を渡つていた。

竹の歌口へ唇をあてながら、うつむきかげんに歩んでくる、その肩のあたり、裾のあたり、チラチラ影絵の雪のようにかすめて消えるものは、上の梢をこして映る、淡い月影の斑であつた。

山をめぐると坂の中腹。

月かげもない両側の崖に、道はやや急な爪先のぼりとなる。

バサリと、時々ころけてくるものは、落椿の音だつた。——弦之丞はこの辺から、一節切を笛袋におさめて、ややしばらくの闇を辿る。

と、山犬のように、四、五人——七、八人ずつ——這いつくばった黒い影が……。

西行塚の平地へきて、ホツと一息入れながら、弦之丞の天蓋がクルリと後ろへ振り向いた途端に、その影は両端の草むらや岩の根に、サツと野分に吹かれた草のようになびいてしまう。

一刻ばかり前に、お綱と万吉とが立った国分寺の触札は、悪魔の囿のように弦之丞の

目を招いていた。そして彼もなにげなくその柵さくの側へ足を吸いよせられて行つた。

「……………」

笠の裡うちから黙読している弦之丞には、さしたる驚動きようどうも見えなかった。むしろ、当然
こうあるべきこととうなずいてもいる風。

路傍の一草のごとく、それを見て去らんとすると、その刹那だ！ 七本松の黒々とわだ
かまつた闇の蔭にシートと息をこらしているかのような氷刃ひようじんの鋭気。

踵きびすをかえして七、八歩、うしろを見るといつのまにか、そこにも狼群ろうぐんのような原土はらしが、
兇刃を植えならべて、じわじわと、静から動へ移らんとする空気をみなぎらしている。

左右の草むらにも閃々せんせんたる伏刃ふくじん。

坂の上、坂の下、四方は全き剣つるぎの垣だ。法月弦之丞は、もう一步でもゆるがせにそこを
動くことはできない。

すると。

どう考えたか弦之丞、足もとの岩の上へ、ゆたりと腰を下ろしてしまった。

同時に、天蓋をぬぎ掛絡けらくをはずし、そして、一本一本の指を握って折り曲げた。

あたかも盲が勘をめぐらすように――。

こういう危地に陥おちた場合、かれは必ず数度の息を静かに吸ってかかる。

いかなる兇暴な殺刃でも、冷々れいれいとして騒がずに、その呼吸の支度をしている間には、容易に、斬ってかかり得ないものだ。

かれに、狐疑こぎと逡巡しゆんじゆんをいだかせ、その間に、われは心耳心眼を研といで、悔くいなき劍の行きどころを決する。

いわゆる、胆たんまず敵をのむのである。

見えざる敵を見、聞こえざる音を聞き、光なき闇をも瞬間に察しなければならぬ。その思慮なく、おのれの勇を過信して、一人の劍を交かわし左右の敵を電でん瞬しゆんに切つて捨てたくらいでは、その寸隙すんげきに八面の殺刀が、たちどころに一人の相手を蜂の巣と刺激するに足るであろう。

弦之丞が師事し、味得しているところの、戸ヶ崎せきうん夕雲せきうんの夕雲流せきうんりゆうなる劍法が、神しん陰げとひとしく、そもそも白虎びやつこ和尚の禅機から発足して、劍氣と禅妙の味通、生死同風の悟徹の底から生まれているだけに、あざやかなる劍を舞わす派手技はでわざよりは、まずもつて劍前に、半眼はんがんの心をいたすこと夕雲工夫の奥伝おくでんとする。

で——今。

もちの木坂に足場をかためて、待ちもうけていた敵の重圍の中核に陥ちつつ、法月弦之丞がことさらに悠々と腰をかけたのもその心。笠掛絡かさかけらくを地に捨てて、指の節を一本ずつ、ポキリ、ポキリと、もむようにして、四方を睥睨へいげいしているのも、まさに、その気構えをととのえているものと思われる。

しかし。

それもほんの一瞬である。

そよそよと吹く風が、およそ、二、三度鬢びんづらを撫でたほどの秒間——。

もの蔭や草むらに、また地に匍匐ほふくしている敵の数も残らず読めた——かるが故に、その陣外にあつて、飛び道具を離す二の手はあるまい。四方に散立さんりつする大樹の梢にも、それらしい奴のよじ登っている様子もないことが分つた。

うむ！ ではまず敵は周圍にある二十四、五人だな。——阿波の原土はらし——それに入りまじつてあるものは天堂一角、お十夜孫兵衛、旅川周馬。

こう、弦之丞は、心のうちでうなずいた。

諏訪すわの大湯で、かれらが自分を擁撃ようげきした後から、弦之丞はすでに前後の経過を察して

いた。今、道者船とり止めの高札を見ても、それが故に、さまで驚きもせず落胆もしなかった。また、信濃境から、後なる三人が先へ駆けぬけて行ったことにも気がついていたので、今宵の伏刃も、あらかた、かくあるべく予期していたところ。

さらば来い！

修法のものに不退転という言葉がある。

つるぎ山へ行き着こうとする目的は、ちょうど彼岸へ達そうとするその信仰と一つだ。ここまで足を踏みだして来ながら、わずか一基の高札文や、三、四十本の錆びがたな刀に行き当ったからとて、やわか、一歩でも足を後へ戻してよいものか。

山も阻めてみよ、海も防いでみよ、阿波の関も固めてみよ。

必ず、法月弦之丞は、つるぎ山の間者牢へまで、この足を踏みかけずにはおかぬ。

おお、それを堰かんとすればするほど、不退転の信を強め、自己の一念の度を加えていてみせる！

と——青年弦之丞が全身の熱血は、ここに、火ともならんほど燃えあがって、手はおのずから腰刀の柄へかかり、胆、気、力の充ちみなぎった五体は、徐々に岩を離れてヌ——と伸びあがった。

さながら、岩角に雄軀をのぼした牡獅子の姿——壮であり美であつた。そして不意に大声の一喝。

「どうしたのだッ！ 卑怯な奴めら」

打って響かせた気魄の鋭さ。

これが、白皙瘦身の美丈夫、あの弦之丞の声音かと疑われる。

シートと静まり返っている八方の閃刃。機を逸したか、胆をのまれてしまったか、それに応じる気合いもないうちに、またかれは凜々たる語気を張って、

「——阿波の原士とは問わでも読めた。汝らの待ち伏せていた法月弦之丞はここにおるぞ。何をしびれをきらしているのか！ さッ、かかつて来いッ！ 斬りつけて来い！ さまたげのないもちの木坂はのぞむ所の足場であつた。どれほど腕の精魂がつづくものか、夕雲流の八天斬り、九地に死骸の山を積んでくれる！」

爛とした眼の向くところ、タジタジと退身に動く相手の気配が、敵ながらもどかしそうであつた。——と弦之丞は一方の物かげへ向かつて、

「——旅川周馬はいないか！ お十夜孫兵衛はそこにおらぬのか！ 天堂一角はいかが致した。いつもこそこそと拙者をつけ狙うておるくせに、なぜ今ここへ真つ向に躍り立つ

て、いさぎよく弦之丞へ名乗りかけぬか。——ウウム！ 返辞がないな！ では逆礼ぎやくれいながら待ち伏せられたこのほうから初太刀しよだちがまいるぞッ——」

「生意気なッ」

と、初めて、怒声を叩き返したのは、剽悍ひょうかんなる原士のひとり、無謀！ 血気な太刀に風をくらわせて、閃光せんこうとともに弦之丞の身边へ躍りかかつて行つた。

待つや久し——

柄つかに満まんを持していた弦之丞の片肘かたひじ、ピクリツと脈を打ったかのごとく動いて、真まつ向こうに躍つてきた影をすくうかとみれば、バッ——と鞆さやを脱した離弦りげんの太刀たち！

それはひそやかに、後ろに廻つていたものの腰車を払つて、遺憾いかんなきまでに斬つて抜け、左へ返すやいな、八相そうの落し。

剣風一陣、もう三名が血まつりの犠牲にえとなつた。

「わア——ッ」

という関とぎの声、期せずして、山をゆるがし、皓々こうこうたる刀林とうりんをどよませてきたのは、その途端だ。

血をみて発作的にふるいあがった声——獸性も人もけじめなきかを思わする兇暴なる挑戦の猛吼。

「それッ」

「相手はひとりだ！」

「鬼神ではあるまい！　ひるむなッ」

二十余名の原士の姿、ここに黒々と明らさまなる影を描き、かつ躍り、坂の下段、坂の上方から、弦之丞ひとりを挟んでミリミリと鋭刃を詰めあつた。

すでに、返り血の斑点を身に浴び、劍それ以外に何もものもない、無想境の神に入つた弦之丞は、仆れ重なつた三個の死体に片足を踏まえて、

「オッ。いざ来い！」

と無銘の皓刀、ふたたび、八相の天に振りかぶつて、双眸らんらん、四面に構えた。

「むむッ」

「おおッ」

と取りかこむ数多の人数——ズ、ズ、ズ、ズ——と弦之丞の周りを巡つて動いていたかと思うと、坂の上手の者六、七人、足場のいい地勢から、かこみをくずして乱劍の太刀風

荒く、いちどにドツと斬りつける！

「押しきれ！」

「退くなッ」

と坂の下手へ廻った者も、機を狙って切ツ尖をそろえ、颯、颯、颯然！ 真つ黒になつてなだれかかる――

劍の光は閃々と乱れて見えたが、その時、ここ、もちの木坂の一地点――ほとんど、人と人と人とのかたまりが、一個の野晒をあばき合う狼群のごとく眺められて、さしも、法月弦之丞、どうなってしまったか、その群影に揉みこまれて、しばらくの間というものの、かれの姿を識別しようもない。

が、それも一刻。

ワツとどよみ立ったかと思うと、すべての影がボヤツと隠れた――四、五人斃れた血煙の霧だろう――と見れば刹那に弦之丞の姿、逆風劍の切ツ尖を、上手の者の足もとに薙ぎつけて、まっしぐらに坂の上手へ踊り進んでいる。

逃げるかと見て、追いかけると、不意に、一転して立ちなおった。こんどは地勢を改めて、すべての人数を下へ見おろし、吾から寄つて左風劍、右風の劍、無二無三に斬つてま

くる。

その鋭刃^{えいじん}になぎ立てられ、半数あまりの原士たちが、算をみだし、傷を負って、ドドッ——と下り勾配^{こうばい}へ押し崩れてゆくのを、夜叉^{やしや}のごとく追いかけて、ひとりあまさず斬り伏^{きふ}させずにはやまないかにみえた。

思うに、今こそ、弦之丞が剣をとつての本相は、かれが平常の、白皙^{はくせき}柳眉^{りゅうめい}の柔和^{にゅうわ}仮面^{めん}をかなぐりすて、獅身夜叉面^{ししんやしゃめん}のおそろしき本体を見するのであろう。

逃げおくれるのを跳び斬りに切ッて放し、なおも疾風！ 引ッさげ刀！ ピューツと血糊^りをすごきながら追って走ると、そのうしろへ、

「待てッ、弦之丞——」

とからみついた閃光^{せんこう}がある。そぼろ助広の閃光であつた。

「なにッ」

と坂の勾配^{こうばい}に、情勢^{だせい}のついた行き足を止めて、ふりかえるや、その真眉^{まみけん}間へ、

「かッ！」とばかり、目のくらむような氣^き当と一緒に、猿臂^{えんび}のばしにふりつけてきた岩^{がん}砕^{さい}の太刀^{たち}。

丹石^{たんせき}流の呼吸である。

業^{わざ}刀はそぼろ助広、持ち人^てはいうまでもないお十夜孫兵衛。

チャリン！ という音の冴え。双方の鏢^{つば}へ——鏘^{しょう}然^{ぜん}として、まッ青な火が降った。

斬^きるか、斬られるか。

やるか、とるか。

剣と剣の間には、毛髪をいれる妥協もない。

触^ふれたがさいご、焼^{やき}金^{かね}からシューツと青い火花が飛ぶ——火花は生命^{いのち}の目^まばたきだ。

豹^{ひょう}の四肢^しのごとく、伸縮の自由な孫兵衛の腕^{うで}ぶしには、一種^{いっしゆ}の粘^{ねん}力^{りよく}があつてなかなか

かあなどり難い。ことには弦之丞がすでに散々な疲労をおぼえているに反して、その氣息には新しい力がある。

すさまじい一合二合！ そこでガツキと鏢^{つば}が食いあつたが弦之丞、坂の下寄りへ廻つていたので、柄手^{つかで}をねじつて、ひッばずした。

「あつ！」と、その時、孫兵衛のほうに、不意に息が抜けたのは、ヒタ押しに上方から鏢^つ競^{ばぜり}を押す気ごみであつたらしい。かれの上体は弾^はみ^ずをくつて、坂を斜めに泳いでしまった。すると、

「おのれツ」と、また一人。

小高い所から飛び下りて、片手かぶりの大刀を、そのまま梨割なしわりにふるって落してきたのは、殿しんがりをしろと孫兵衛にいわれていた、天堂一角。

いつまで周馬の現われぬのに業をにやして、もう我慢ができないというふうに、片手上段で飛び下りたが、早くも弦之丞、剣下けんかを交わしてしまったのみか、裾すそを払って、その隙に、一方の低地へ駈け下りた。

そこは最前、弦之丞がここへ来る前に、三人を初め原士のすべてが、たむろをしていた草原で、わざとそこへ走ったのは、なお闘うべく地相を選みなおしたもののか。

かれが平地へ立ちなおったのを見ると、草原の隅に身を屈していた旅川周馬、ムクムクと身を起こして、しずかに近くへ近くへと這いまわって行つた。——そのまに一角とお十夜は、さらに猛然と、切ツ尖きさきをならべ、たとえどんなことがあるとも、今夜こそは弦之丞を刺しとめずにはおかぬという氣勢を示した。そして、先に乱離らんりとなった原士の方も駈けあわせてきて、捲土重来けんどちようらいの手ぐすねをひき、ふたたび疲れた弦之丞を危地へ誘い込もうとする。

もう最前の場所からこの平地までの間には、弦之丞の烈れつ刀とうにあたって血みどろになっ

たものが、少なくも八、九名はのた打っている筈だが、残余の氷刃が一カ所に晃々と集立すると、いっこう人数が減つたとはみえない。

そのおびただしい光ものが、チカチカきらめくたびごとに、弦之丞の命が、一分二分ずつ、磨り減らされてゆくのではあるまいか——どう倫を絶した使い手にしろ、疲れぬ肉体というものを持つてゐる筈がない。

だが、静かにそこを冷観すると、なんとという壮美な活景だろう。空には妖麗な金剛雲——地にはほのかな宵月の明り。

花には露の玉があり、草は柔らかい呼吸をしていた。そこへ、人間の生血が惜しげもなくフリまかれる。

かくて麗しい夜は夜だが、お綱は苦しい、修羅の刻々だ！ 万吉も深い血の池へ溺れこんでいるようにもがいた。二人は縛められてゐる松の根元を転々としながら、どうかして縄を噛み切ろうと、さまざまに悶えて体を蝦のごとく折り曲げた。

すると、万吉の縛り付けられている松の木から、二、三間ばかり離れた所に、旅川周馬が身を折り敷いて、玉葉をこめ火縄を吹き、あなたにある弦之丞の姿を狙つて、あわや短銃の引金を引こうとしている。

「畜生！……」と思つたが、縄目に自由を奪われている万吉には、どうする術もない。
しかし、最前から、ジツと身を隠し通していた旅川周馬、引金をひいたらただ一発で、
必ず弦之丞の急所を撃つてみせようとする意図なのに相違ない。

危機は間髪^{かんはつ}！

弦之丞の致命をつかみかけている危機は、かれの身边よりむしろここにあつた。

「エエいまいましい！　みすみすそこにいる奴を眺めながら——」と万吉の齒が下唇をか
みしめた。と、かれは足を踏ん張つて、松の根元から芋虫^{いも}のように転がった。そして、五
体の肉をもがかせて、縄の伸びるかぎり周馬の方へズリ出してゆく——。

周馬はといえば、今や、構えを取つた銃^{つつさき}先の焦点へ全念をこらしかけていたので、そ
れとは気づかずに指へ力をこめかけると、いきなり、伸びて廻つた万吉の足が、ウム！
とその片肘^{かたひじ}を蹴払つた。

とたんに、ズドーンという硝^{しょうやく}薬のひびき。的^{まと}を狂わせて天空へ音波をゆすつた。

徒勞になつた轟^{ごうおん}音に、耳をガンとさせた旅川周馬。

はからぬ邪魔をした万吉の足へ、カツと眼をいからせて、

「ちえッ、なにをしやがる！」

と、まだ余煙のからんでいる短銃をイヤというほど叩きつけた。

と——今の爆音に気がついて、旋風のごとく、そこへ猪突してきた者がある。

眉はあがり、髪はみだれ、氣息はあらく炎のよう——手には幾多の生胴をかけた血あぶらのうく直刃の一刀。

それを引つさげて疾駆してきた。

弦之丞である、天魔神を思わする姿である。

さながら潮をさしまねくように、わツと刃围をくずして追いかかる後ろの声に振り向きもせず、来るや、そこなる周馬を目がけて、

「えーいッ」

とばかり一跳足。

逆風を切ツて横薙ぎに一揮り、相手の胴へビュツと走つたは、またもやあの手——弦之丞が今宵同じ手ぐちで四人までも斬っている夕雲流の逆風剣——すなわち八天斬りと誇称されるあぶない切ッ失。

周馬。

いきなりその劒風をくらッて、吹ッ飛ばされたかのごとく、あッ——と後ろへ片足立ち、
氣^き當^{あて}を返して腰の太刀を、

「おうッ」とすぐに抜きあわしたが、無論、自分の体^{たい}を退^ひいているので、その払いは虚に
して空、キリキリ舞いをやつたにすぎない。

もう一步——その刹那に、弦之丞の返し太刀が、足とともにふって落されたら、旅川周
馬、その時、梨か竹かのように二ツに割られている筈である。

だが、すぐ後へ——お十夜と一角が電^{でん}馳^ちして来た。原士の乱刃が迫っていた。

で——弦之丞はその寸^{すん}隙^{げき}を惜しんだのであろう。周馬へまいる余地のある太刀を、ヒ
ラリと返して横へ駈けるや、そこに仆れていた万吉の縄目を、プツリと斬って孫兵衛と一
角のほうを防いだ。

何か、異様な叫びをあげて——まったく何を叫んだか分らない——はね上がった目明し
の万吉は、お綱のそばへ転げて行つて、次にかれの縄を切った。

猿ぐつわを振りほどくと、お綱は、吾を忘れて、弦之丞の名を呼んだ。

弦之丞も、無論、それをお綱の声と聞いたであろう。だが、周馬、一角、お十夜——こ
う三人の鋭^{えい}刃^{じん}を前にして、かれは死力に汗をしばっていた場合であるから、或いは、聞

こえなかつたかも知れない。

万吉は新手の意気ごみで、道中差の鞆を払った。お綱もまた、母のかたみであり、剣山に辿りついた時、父の世阿弥に名のるべき唯一の証として、愛護してきたあの銘刀へ手をかけた。

かくて――

春月を隠した美しい金剛雲の下で、その夜、惜し気もなく犠牲に散らされた鮮血が、どこまで、もちの木坂満地の若草を紅にしたことか？ ……。

やがて、刃影の跳躍も、一場の夢幻となつてかき消えた。そして、木曾の往還は何ごともなかつたように夜が明ける。

小荷駄の鈴が街道の朝を知らせ、小禽が愉快にさえずりだした。真昼の太陽に草の露が乾くころには、墨汁をこぼしたかと思われる道ばたの血痕も、馬蹄やわらじの土埃に蔽われて、誰の目にも、ゆうべの修羅が気づかれない。

幾つもの死骸や負傷はどこへ運び去られて行つたか、夜明けの前に手ぎわよく片づけられていたのである。で、すべての旅人はみな常と変りはなく、もちの木坂を通りすぎたが、敏覚な虫類――虻や蝶や太陽虫などはいたる所の草の根から、面をそむけて飛んでいた。

青空文庫情報

底本：「鳴門秘帖（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年9月11日第1刷発行

2008（平成20）年12月24日第22刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2013年2月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳴門秘帖

木曾の巻

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>